

鍮水遺跡

-第1次発掘調査報告-

一般県道藤山国分一丁目線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和2年（2020年）2月
久留米市教育委員会

鑓水遺跡

-第1次発掘調査報告-

一般県道藤山国分一丁目線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和2年（2020年）2月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、市民が主役のまちづくりを進め、市民の夢や希望が実現する生活空間を作ることにより、市民がこの地に誇りと愛着を持って住み続けたいと思えるまちを創ることを目指しています。その一方で、古くから水路と陸路の要衝だった久留米市には先人達の残した文化遺産が数多く残っており、その保存を図りつつ究明を進めています。

今回の調査は、藤山甲塚古墳や釜口古墳、鍵水古墳群などの古墳が多く残る高良内町で実施しました。その結果、縄文時代の遺構や遺物、そして中世の屋敷跡とみられる遺構を発見し、高良内町の歴史を語るための新たな資料を得ることができました。これらの成果が地域史の究明や普及、久留米の歴史や文化財保護に対する市民の理解に貢献できれば幸いです。

なお今回の発掘調査に際して、福岡県久留米県土整備事務所をはじめ、近隣住民の皆様に多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

令和2年2月29日

久留米市教育委員会
教育長 大津 秀明

例 言

1. 本書は、平成 30 年度に福岡県久留米県土整備事務所の委託を受けて、一般県道藤山国分一丁田線改良事業に先立ち実施した、鍮水遺跡第 1 次調査の発掘調査報告書である。
 2. 本調査の略記号は Y R Z - 001、調査番号は 201802 である。
 3. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の西拓巳が担当した。
 4. 遺構実測図は、主に西と発掘調査臨時職員の山田治代が作成し、一部を発掘調査臨時職員の案納哲夫と柳鈴子が補助した。遺構配置図はトータルステーションを用いて測量し、測量データは株式会社 CUBIC 製の「遺構くん cubic」で編集・保存した。土層は、手測り (1/10) で西が記録した。浄書は、西と専任非常勤職員の今村理恵がデジタルトレースで行い、「遺構くん cubic」と米アドビシステムズ製の「Adobe Illustrator」を用いた。
 5. 遺物実測図は西が作成し、浄書は今村がデジタルトレースで行った。遺物の拓本は、発掘調査整理臨時職員の横井理絵が作成した。出土遺物観察表は西が作成した。
 6. 遺構の個別写真は、マミヤ RB67 を用いて 6 × 7 判フィルムで西が撮影した。全景写真の一部は有限会社空中写真企画に委託して撮影した。遺物写真は、リコー PENTAX K-1 II デジタルカメラを用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて西が撮影した。
 7. 遺構実測図は、国土調査法第 II 座標系 (世界測地系) を基に作成した。図面の方位は全て座標北を示す。なお、座標は熊本地震に伴うパラメータ補正を実施した。
 8. 土層の色調は、『新版 標準土色帖』(日本研事業株式会社、昭和 42 年) に準拠した。
 9. 本書に使用した遺構の略記号は、S D - 溝、S K - 土坑、S P - ピットを意味する。
 10. 本文と遺物実測図、遺物観察表、写真図版の遺物番号は同一である。
 11. 遺物実測図の調整の線は、実線「————」が明瞭な稜線を、間隔が長い破線「— — — —」が不明瞭な稜線を、一点鎖線「— - - - —」が回転ナデを、間隔が短い破線「— — — —」がケズリを示す。
 12. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・ [] は復元値を、() は残存値を、- は欠損または該当する部位が無いことを意味する。
 - ・ 土器や陶磁器、石製品の色調は、『新版 標準土色帖』に準拠した。
 - ・ 胎土は、0.5mm 未満の砂粒を「微砂粒」、1mm 未満を「細砂粒」、1mm 以上を「砂粒」とした。
 - ・ 遺物番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。
- (例) 201802 - 000001
 調査番号 登録番号
13. 出土遺物や図面、写真等の諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
 14. 本書の執筆と編集は西が行った。

本文目次

I. はじめに	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の体制	2
(3) 調査の目的と経過	5
II. 位置と環境	7
III. 調査の記録	10
(1) A区の調査	10
(2) B区の調査	16
(3) C区の調査	20
(4) D区の調査	21
(5) E区の調査	22
IV. 総括	24
(1) 縄文時代～古代の遺構と遺物について	24
(2) 中世の遺構と遺物について	24
(3) おわりに	25
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 一般県道藤山国分一丁田線改良事業位置図 (1/5,000)	1
第2図 調査区配置図 (1/800)	5
第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	8
第4図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)	8
第5図 A区遺構配置図 (1/200)	11
第6図 SD1土層図 (1/20)	12
第7図 SD2土層図、SD11断面図、SK5・8実測図 (1/20、1/40)	13
第8図 SK17実測図 (1/40)	14
第9図 A区出土遺物実測図1 (1/4、1/2)	14
第10図 A区出土遺物実測図2 (1/4、1/2)	15
第11図 B区遺構配置図 (1/200)	17
第12図 SK60・65～67・70・72・73実測図・土層図 (1/40)	18
第13図 B区出土遺物実測図 (1/4)	20

第14図	C区遺構配置図(1/100)	21
第15図	S K74実測図(1/40)	21
第16図	C区出土遺物実測図(1/4)	21
第17図	D区遺構配置図(1/200)	22
第18図	E区遺構配置図(1/100)	22
第19図	E区南東隅壁面土層図、S D78断面図(1/20)	23
第20図	E区出土遺物実測図(1/2)	23
第21図	中世の溝と周辺地形、字界の関係(1/1,000)	25

表 目 次

第1表	A区出土遺物観察表	16
第2表	B区出土遺物観察表	20

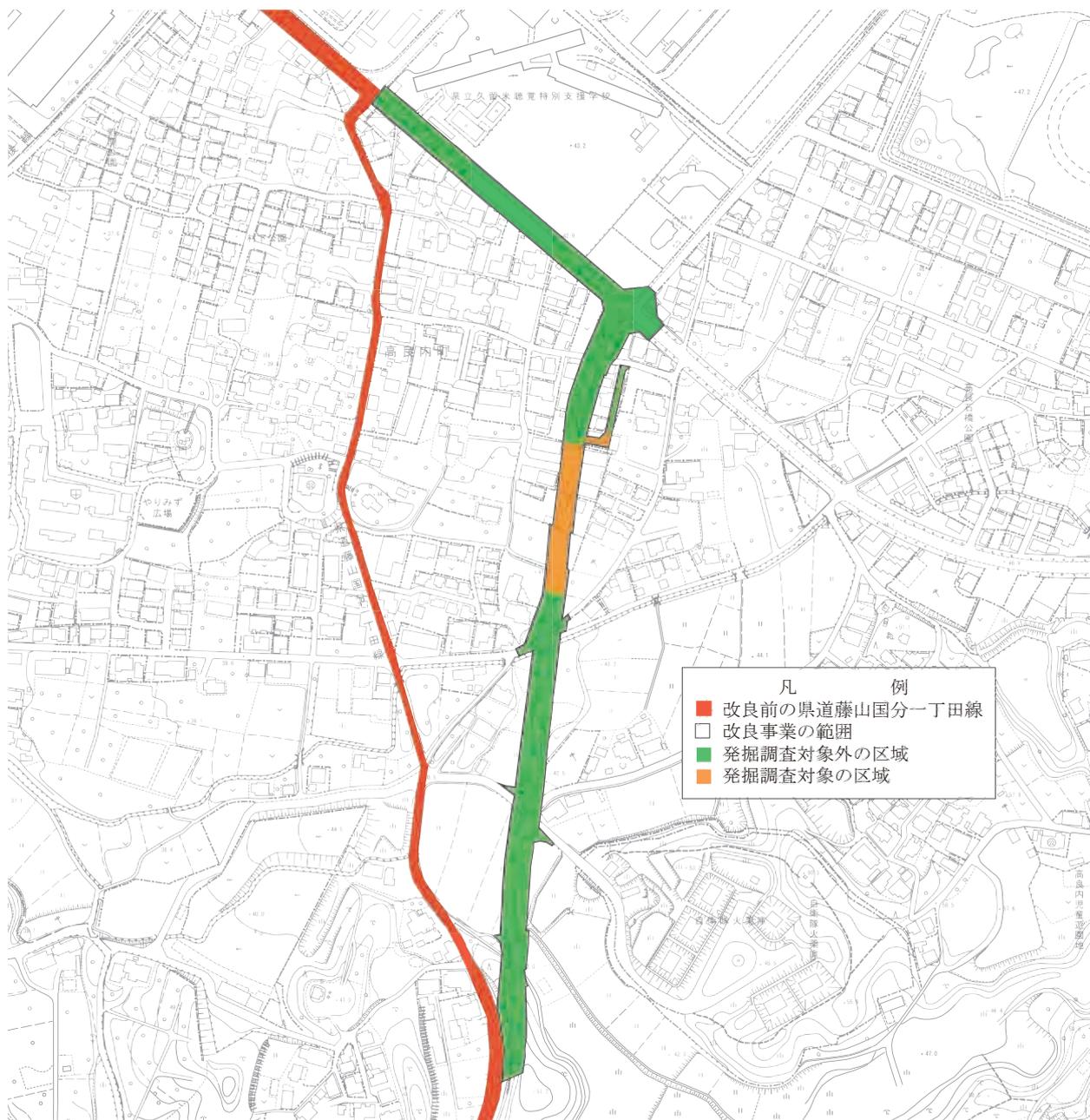
図 版 目 次

図版1 (1) A区調査前全景(南から)	(3) S K8完掘状況(北東から)
(2) B・C区調査前全景(北東から)	(4) S K17完掘状況(南東から)
(3) D区調査前全景(南西から)	(5) S K60完掘状況(北上空から)
(4) E区調査前全景(北西から)	(6) S K65土層(南西から)
(5) A1区全景(南上空から)	(7) S K65完掘状況(北東から)
図版2 A1・A2区全景(南西上空から)	(8) S K66土層(南から)
図版3 (1) A3区全景(南西上空から)	図版8 (1) S K66完掘状況(北から)
(2) A4区全景(南東上空から)	(2) S K67完掘状況(北西から)
図版4 (1) B1区全景(北東上空から)	(3) S K70完掘状況(西から)
(2) B2区全景(北東上空から)	(4) S K72完掘状況(北上空から)
図版5 (1) C区全景(北上空から)	(5) S K73土層(南から)
(2) D区全景(南上空から)	(6) S K73完掘状況(北東上空から)
図版6 (1) E区全景(西上空から)	(7) S D75完掘状況(北東から)
(2) S D1・5・11全景(北東から)	(8) S D78完掘状況(北西から)
(3) S D1北西隅土層(南東から)	図版9 出土遺物1
(4) S D1東辺土層1(北東から)	図版10 出土遺物2
(5) S D1東辺土層2(北東から)	図版11 出土遺物3
図版7 (1) S D2全景(南西上空から)	図版12 出土遺物4
(2) S K5完掘状況(北東から)	

I. はじめに

(1) 調査に至る経緯

本調査は、一般県道藤山国分一丁田線改良事業に伴う事前の発掘調査である。藤山町溝田から諏訪野町東一丁目に至る藤山国分一丁田線（県道 752 号線）は、久留米市中心部と梨の産地として知られる藤山町を結ぶ幹線道である。しかし、聴覚特別支援学校前交差点から南に 700m までの区間は幅員が狭い上に緩やかに蛇行しており、見通しが悪く大型車の通行に時間がかかるなど、朝夕を中心に交通混雑の原因となっている。また、歩道が無く路側の幅も狭いことから、歩行者や二輪車の安全上にも問題があり、歩道を有し幅員の広い直線的な道路の整備が求められていた。



第 1 図 一般県道藤山国分一丁田線改良事業位置図 (1/5,000)

I. はじめに

これに伴い、県道を管轄する福岡県久留米県土整備事務所を事業者とする一般県道藤山国分一丁田線改良事業が計画され、平成 25 年（2013）から用地買収が始まった。平成 27 年（2015）9 月 15 日、事業者から久留米市高良内町 4832 外における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地の大半が未調査地で、かつ北部が周知の埋蔵文化財包蔵地である鎌水遺跡の範囲内に当たることから、9 月 25 日に試掘確認調査が必要である旨を回答した。

平成 28 年（2016）4 月 14 日から 15 日にかけて、用地買収が終わった対象地中央部と南部の試掘調査を行ったが、遺構を確認できなかったことから対象外と回答した。しかし、平成 29 年（2017）10 月 3 日から 4 日に行った対象地北部の確認調査では、地表下 0.3～1.3m で遺構を発見した。そのため事業者に対し、10 月 12 日付で第 1 図に示した範囲の発掘調査が必要である旨を回答した。

平成 29 年 11 月 15 日、事業者から発掘調査の依頼が提出されたため、協議の結果、調査費用は事業者である福岡県が負担すること、平成 30 年度に発掘調査を行い平成 31 年度に整理作業と報告書作成を行うことで合意した。平成 30 年（2018）3 月 6 日、事業者と久留米市長は「鎌水遺跡第 1 次調査発掘調査に関する協定書」を締結したが、事業地の住宅移転に時間がかかり発掘調査の期間が延びることが判明したため、4 月 10 日付で変更協定書を締結した上で、「鎌水遺跡第 1 次調査発掘調査委託契約書」を締結し現地での発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成 30 年 4 月 17 日から始めたが、その後も住宅移転は進行せず、最終的に 10 月 30 日に発掘調査を終了した。

整理作業と報告書作成は、平成 31 年（2019）4 月 15 日付で「鎌水遺跡第 1 次発掘調査整理委託契約書」を締結した上で、令和 2 年（2020）2 月 29 日まで、西町文化財整理事務所で行った。

（2）調査の体制

平成 27 年度（事前確認）

調査委託：福岡県久留米県土整備事務所

所 長：小路 智

副 所 長：荻島 清隆

道路建設課

課 長：尾崎 忠晴

建設第 1 係長：橋爪 博紀

技術主査：中川 裕子

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：堤 正則

調査総括：久留米市

市民文化部

部 長：野田 秀樹

次 長：竹村 政高

文化財保護課

課 長：園井 正隆

課長補佐：山崎万里子

課長補佐兼主査：白木 守

主 査：水原 道範

事務主査：豊福 早苗、塚本 映子

事前確認担当：本田 岳秋、小澤 太郎

平成 28 年度（試掘確認調査）

調査委託：福岡県久留米県土整備事務所

所 長：森田 欣明

副 所 長：荒殿 宏

道路建設課

課 長：山口 甲秀

建設第 1 係長：橋爪 博紀

技術主査：中川 裕子

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：堤 正則

調査総括：久留米市

市民文化部

部 長：野田 秀樹

文化芸術担当部長：甲斐田忠之

次 長：竹村 政高

文化財保護課

課 長：馬場 博文

課長補佐：山崎万里子、白木 守

主 査：水原 道範

事務主査（庶務担当兼務）：豊福 早苗

事務主査（事前確認担当兼務）：塚本 映子

事前確認担当：神保 公久

平成 29 年度（試掘確認調査・協定書締結）

調査委託：福岡県久留米県土整備事務所

所 長：村田 泰英

副 所 長：荒殿 宏

道路建設課

課 長：山口 甲秀

建設第 1 係長：松尾 龍也

技術主査：中川 裕子

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：大津 秀明

調査総括：久留米市

市民文化部

部 長：野田 秀樹

文化芸術担当部長：甲斐田忠之

次 長：西村 信二

文化財保護課

課 長：馬場 博文

課長補佐：山崎万里子

課長補佐兼主査：白木 守

主 査：水原 道範

事務主査（庶務担当兼務）：豊福 早苗

事務主査（事前確認担当兼務）：塚本 映子

事前確認担当：神保 公久、大隈 彩未、

橋之口雅子（任期付非常勤職員）

I. はじめに

平成 30 年度（発掘調査）

調査委託：福岡県久留米県土整備事務所

所 長：篠田 博邦

副 所 長：大隈 徹浩

道路建設課

課 長：長友 和也

建設第 1 係長：松尾 龍也

技術主査：田吹 泰孝、横山 智

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：大津 秀明

調査総括：久留米市

市民文化部

部 長：松野 誠彦

文化芸術担当部長：宮原 義治

次 長：西村 信二

文化財保護課

課 長：水島 秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼主査：白木 守、丸林 禎彦

主 査：水原 道範

事務主査：塚本 映子

庶務担当：市村久美子

古賀 文子（任期付非常勤職員）

調査担当：西 拓巳

平成 31 年度・令和元年度（整理・報告書作成）

調査委託：福岡県久留米県土整備事務所

所 長：篠田 博邦

副 所 長：大隈 徹浩（平成 31 年度）

山口 甲秀（令和元年度）

道路建設課

課 長：長友 和也（平成 31 年度）

平井 信之（令和元年度）

建設第 1 係長：松尾 龍也（平成 31 年度）

菅野 栄治（令和元年度）

技術主査：横山 智

田吹 泰孝（平成 31 年度）

技 師：安河内秀輔（令和元年度）

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：大津 秀明

調査総括：久留米市

市民文化部

部 長：宮原 義治

文化芸術担当部長：竹村 政高

次 長：西村 信二

文化財保護課

課 長：水島 秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼主査：白木 守、丸林 禎彦

主 査：水原 道範

事務主査：塚本 映子、小澤 太郎

庶務担当：市村久美子、箔谷 綾

整理担当：西 拓巳

今村 理恵（専任非常勤職員）

発掘調査臨時職員（平成 30 年度）

案納 哲夫、井上 知義、江藤 光男、國武 三歳、佐田農夫男、東 須賀子、日吉 政勝
堀江 俊文、柳 鈴子、山田 治代、横山 満浩

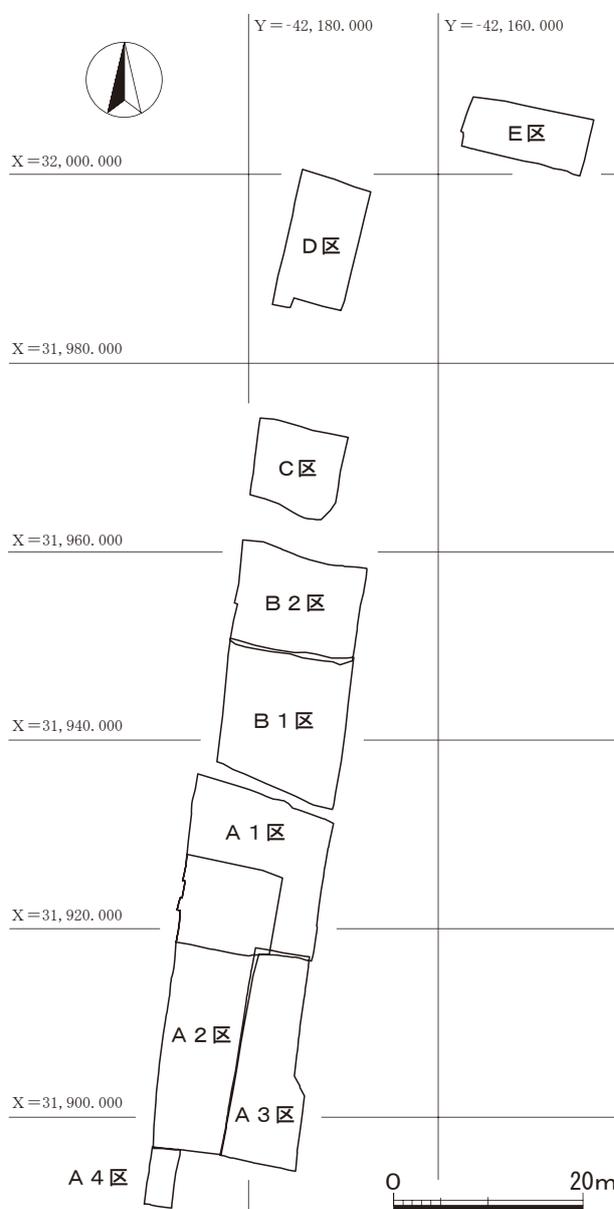
発掘調査整理臨時職員

古賀 貴子（平成 30 年度）、石崎 玲子（平成 31 年・令和元年度）

（3）調査の目的と経過

礎水遺跡は、平成 11 年（1999）の試掘調査（11 文財第 1-133 号）で中世の遺構や遺物が確認された遺跡だが、これまで発掘調査の機会に恵まれず、その実態は不明だった。そこで、今回の調査は遺構と遺物の把握を目的として実施した。なお、対象地の住宅の移転が完了していない上に集合住宅の上下水道管や雨水管が対象地を走っており、通路や排土置場などを確保する必要があることから、発掘調査は第 2 図のとおり 9 分割しながら実施した。対象面積 2,216 m²のうち、調査面積は 1,160 m²である。以下、調査の経過を記す。

- 4 月 17 日 調査器材を搬入し、発掘調査に着手する。D 区の表土剥ぎを開始するが、降雨で中断する。
- 18 日 D 区の表土剥ぎを完了して、現場作業員を投入し遺構検出を行う。同日中に遺構の掘削と測量を始めるが、攪乱と判断し、一部の掘削に留める。
- 26 日 掘削と測量を終え、D 区全景を高所作業車で撮影する。
- 27 日 D 区の埋め戻しを実施する。
- 5 月 1 日 A 1 区の表土剥ぎを開始する。
- 9 日 大型連休と雨天を挟み、A 1 区表土剥ぎを完了する。並行して、遺構検出を始める。
- 10 日 A 1 区の遺構検出を経て、遺構掘削と測量、写真撮影を始める。
- 17 日 A 1 区全景を高所作業車で撮影する。
- 22 日 A 1 区と A 2 区の反転を開始する。



第 2 図 調査区配置図 (1/800)

I. はじめに

- 24日 A2区の表土剥ぎを完了し、A2区の遺構検出を始める。
- 5月29日 A2区の遺構検出を終え、遺構の掘削と測量、写真撮影を始める。梅雨に入り、進捗がスローペースになる。
- 6月22日 A2区全景を気球で撮影する。
- 27日 追加の調査を経て、A2区とA3・A4区の反転を始める。
- 7月4日 A3・A4区の遺構検出を開始するが、豪雨に伴い数日作業を休止する。
- 10日 A3・A4区の遺構検出と並行して、遺構の掘削と測量、写真撮影を始める。
- 19日 A3・A4区全景を高所作業車で撮影する。
- 23日 A3・A4区の埋め戻しを行う。B区の住宅とE区に隣接する住宅の移転が完了していないため、現地での発掘調査を中断する。
- 8月22日 B区の住宅撤去に時間がかかり、発掘調査の中断が長期化することから、調査器材を一旦すべて撤収する。
- 9月4日 発掘調査を再開し、調査器材を再び搬入する。
- 5日 B1区の表土剥ぎを開始する。搬入路が狭く小型の重機しか搬入できない上に、排土量も多く時間がかかる。事業者との協議で、B～C区は調査区の埋め戻しをせず事業者で排土を搬出することで合意する。
- 11日 B1区の遺構検出を実施する。
- 14日 B1区の遺構掘削に入るが、1日で掘削を終える。並行して、測量を開始する。
- 19日 B1区排土の搬出を経て、B1区全景を高所作業車で撮影する。
- 25日 雨天と連休を挟み、B1区とB2区・C区の反転を始める。
- 27日 B2区・C区の表土剥ぎ完了。C区の遺構検出を行い、遺構掘削と測量を開始する。
- 28日 C区全景を高所作業車で撮影する。台風24号接近に伴い、養生を行う。
- 10月1日 台風一過、B2区の遺構検出を行い、遺構の掘削と測量、写真撮影を始める。
- 4日 B2区全景を高所作業車で撮影する。E区に隣接する住宅が移転しておらず、台風25号接近に伴う二度目の養生を兼ねて、調査器材を一旦撤収する。
- 10日 E区に隣接する住宅の移転に時間がかかるため、住宅の移転を待たずにE区の発掘調査に入ることで、事業者と住人の間で合意が形成される。E区の調査に先立ち、住人の要望でE区北面に防音壁を設置する。
- 15日 調査器材を再び搬入し、E区の表土剥ぎと遺構検出を行う。
- 17日 E区の遺構掘削を実施し、測量と写真撮影を始める。
- 19日 E区全景を高所作業車で撮影し、追加の測量を経て調査器材の撤収を始める。
- 22日 E区の埋め戻しを行う。
- 26日 E区北面の防音壁を撤去する。
- 30日 調査器材の撤収を完了し、現地での発掘調査を終了する。

II. 位置と環境

久留米市は筑紫平野の中心部に位置し、筑後川の中・下流域に面する。久留米市の南東部に聳える耳納山地の西端には、高良山や明星山、飛岳といった標高 200～300mの山地が位置する。明星山と飛岳の西麓には、耳納山地から派生する丘陵が点在し、桃太郎川や上津荒木川に開析されて複雑な地形を呈する。鍬水遺跡は、桃太郎川に面した丘陵上の標高約 42～43mの地点に位置する。

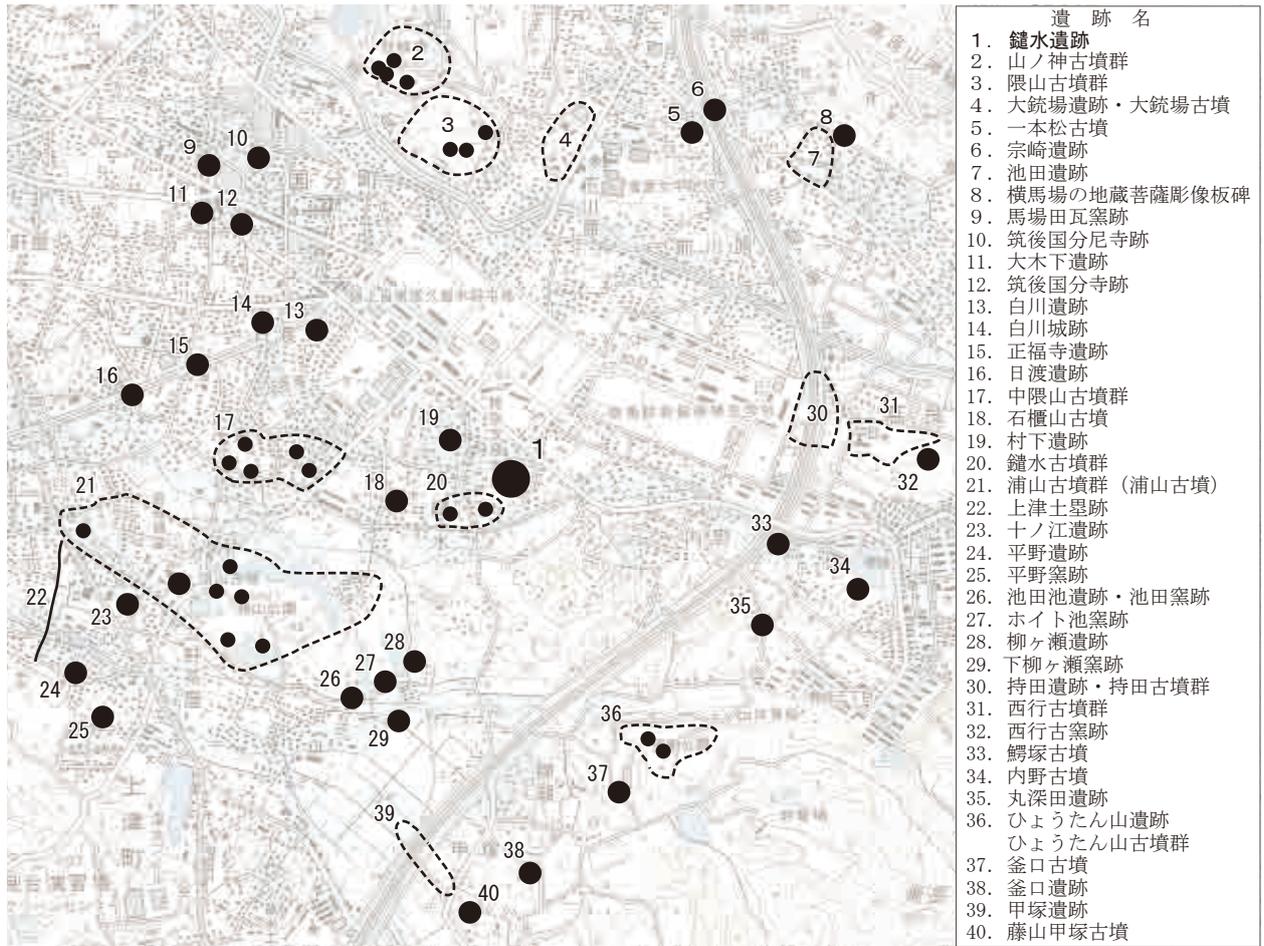
周辺における人類の足跡は、池田池遺跡やひょうたん山遺跡、甲塚遺跡で見つかった旧石器まで遡り、一帯が狩猟の舞台だったことを示す。縄文時代には、台地上を中心に散布地が分布し、日渡遺跡や持田古墳群、甲塚遺跡で早期の押型文土器、日渡遺跡や筑後国分寺跡、持田遺跡で曾畑式土器などの前期の土器、日渡遺跡で中期の船元式土器や並木式土器、大木下遺跡と筑後国分寺跡、持田遺跡、丸深田遺跡で後期の土器が出土した。遺構は、白川遺跡や正福寺遺跡、日渡遺跡で後期の土坑群が検出され、特に正福寺遺跡第 7 次調査地点では、谷部に位置する土坑群から 140 点の編組製品や木製品が出土した。これらは全国でも数少ない出土例として注目でき、特に石斧が装着されたままの直柄は、縄文時代では唯一の出土例である。また、甲塚遺跡では晩期の土坑が見つかり、黒曜石の石核や剥片が多数出土したことから、石器製作の様相が窺える。

弥生時代には、筑後国分寺跡で中期後半の竪穴住居 2 基と後期後半の竪穴住居 1 基、日渡遺跡で後期中葉～後半の掘立柱建物や竪穴住居群、十ノ江遺跡で断面 V 字状の溝が検出された。日渡遺跡で出土した内行花文鏡は、遺構検出時の出土遺物で遺構を伴わないが、ベンガラの特徴が残る舶載鏡で注目できる。このほかにも、大銃場遺跡で甕棺墓や箱式石棺墓の発見が伝わり、柳ヶ瀬遺跡で弥生土器が表採されたことから、中期から後期を中心に集落が点在したと想定される。

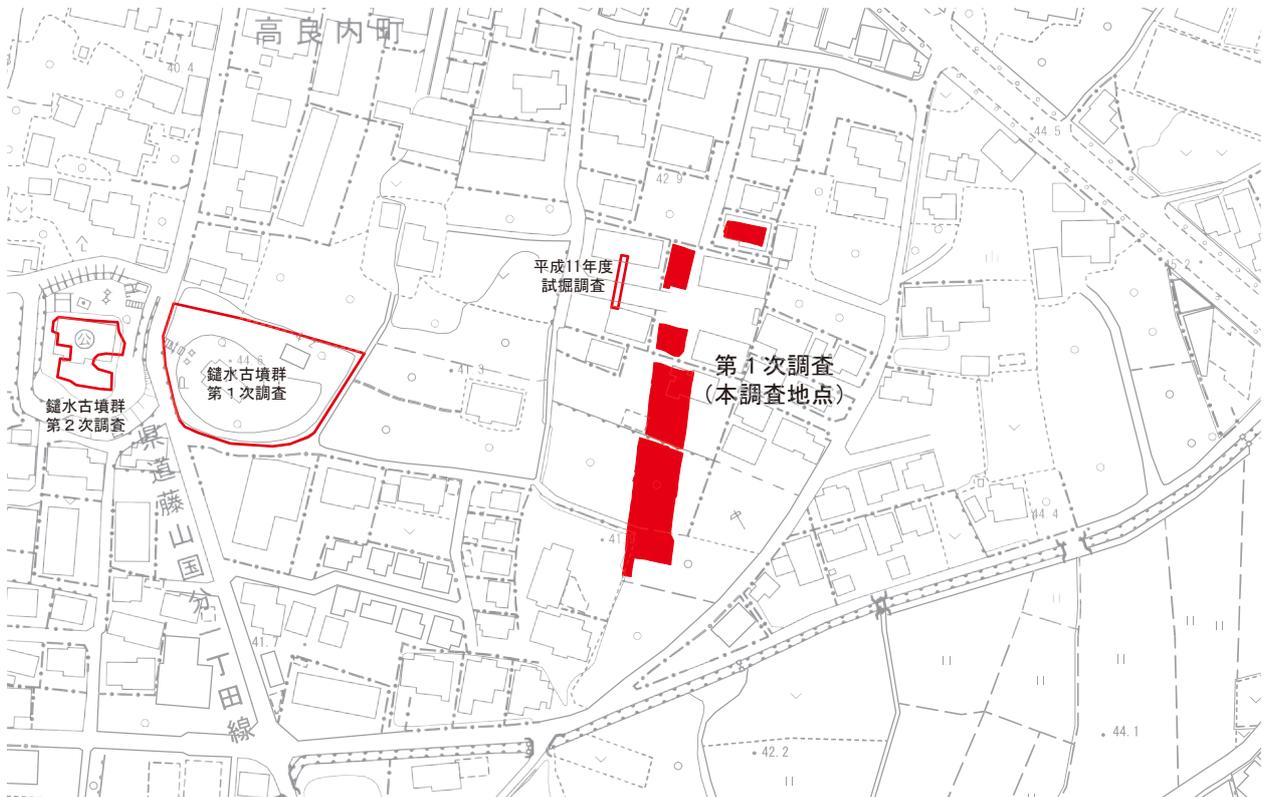
古墳時代には古墳群が分布し、調査が行われたものだけでも、開析された台地上に位置する山ノ神古墳群や隈山古墳群、大銃場古墳、中隈山古墳群、鍬水古墳群、一本松古墳、持田古墳群、高良山や明星岳、飛岳の裾野に位置する西行古墳群や鰐塚古墳、内野古墳、釜口古墳、ひょうたん山古墳群が挙げられる。鍬水遺跡の西 150mにある鍬水古墳群は、ベンガラが付着した石材が出土したほか、小形の竪穴式石室や箱形石棺を有する。溝から出土した土師器から 5 世紀前半～中頃の築造と考えられる。古墳群の中心となる前方後円墳として、石棺に文様が刻まれた浦山古墳や、横口式家形石棺が見つかった石櫃山古墳、石障を有し壁面に顔料を塗った石室の藤山甲塚古墳がある。また、釜口遺跡では 5 世紀前半の円形周溝墓が見つかり、周溝から出土した山陰系の土師器から、山陰地方と被葬者の交流が想定される。さらに、6 世紀の須恵器窯である平野窯跡や池田窯跡、池田窯跡に隣接する下柳ヶ瀬窯跡は、古代の瓦窯の前段階に窯業が営まれていたことを窺わせる。集落遺構は、筑後国分寺跡で古式土師器を伴う土坑、平野遺跡で 6 世紀後半の掘立柱建物と竪穴住居群が検出されており、後者は豪族居館を彷彿とさせる掘立柱建物が古墳群との関連を示唆する。

古代には、上津荒木川の谷部を塞ぐように上津土塁が築かれた。『日本書紀』天武天皇 7 年 12 月 (679) 条に登場する、筑紫国地震に伴うとみられる崩落と修復痕が確認されたことから、その築造

II. 位置と環境



第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第4図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

年代は7世紀後半以前と推定され、大宰府防衛のために設けられた防御施設と考えられている。また、鑓水遺跡の北西約2.1kmに筑後国分寺と国分尼寺が設置された。その建立年は明らかではないが、『続日本紀』天平勝宝8年(756)12月20日条に他国の国分寺と共に登場することから、8世紀半ばには整備されたとみられる。筑後国分寺・国分尼寺周辺では、大木下遺跡で8世紀後半から9世紀前半の溝、白川遺跡で8世紀～9世紀前半の竪穴建物や、道路跡とみられる並走する溝、「延喜」銘の平瓦、正福寺遺跡で9世紀後半の溝が見つかっており、国分寺周辺の集落の様相を示す。瓦窯も点在し、国分寺に隣接する馬場田瓦窯跡やへボノ木遺跡出土瓦と同範の瓦が表採されたホイト池瓦窯跡、白川遺跡や筑後国府跡、筑後国分寺跡の出土瓦と同じ「延喜十九年」銘瓦などが表採された西行古窯跡が挙げられる。日渡遺跡では、10世紀初頭の土坑から「朝」銘の銅印が出土しており、郡司層との関連が想定される。国分寺と国分尼寺は10世紀以降の律令体制の衰退に伴い規模を縮小したとみられ、11世紀代を最後に遺構は確認されていない。周辺では、白川遺跡で9～12世紀の土坑群、高良山南麓に位置する宗崎遺跡と池田遺跡では11～12世紀の溝や土坑、配石遺構などが検出されており、古代末期から中世初頭の集落の存在が想定される。

中世以降、高良内町一帯は高良山神領として高良大社の勢力下におかれた。仁治2年(1241)の『筑後国検交代使実録帳』には国分寺の荒廃が記録されているが、筑後国分寺跡では龍泉窯系青磁碗などの貿易陶磁器や瓦器塚が出土しており、14～15世紀の掘立柱建物が検出されるなど、集落の存在を示唆する遺構や遺物が見つかった。周辺では、大木下遺跡の12～13世紀の土坑や土墳墓、日渡遺跡と正福寺遺跡の13世紀の土坑、白川遺跡の12～15世紀にかけての複数の溝、日渡遺跡や池田遺跡の14～15世紀の大溝が集落の存在を窺わせる。また、白川城は高良山座主家の一族である、丹波良運の居城だったと伝えられる。池田遺跡の近くには、横馬場の地蔵菩薩彫像板碑が位置する。往時は里道沿いにあった地蔵板碑で、応永11年(1404)11月の銘を有し、応永年間の地蔵板碑の好例として市の有形文化財に指定されている。

鑓水集落の起源について、地元の伝承は元和7年(1621)の初代久留米藩主有馬豊氏の転封に従い、丹波国福知山から移住した石工集団まで遡ると伝える。鑓水遺跡の北西約300mに位置する村下遺跡では2条の溝が確認されており、近世の集落に関連する遺構とみられる。鑓水の地名は、『元禄八亥年調子御郡中品々寄』(1695、『福岡縣史史料』第九輯)に初めて登場する。高良内村と近村にまたがる野原で、その規模は15町(約1.6km)四方とある。安永6年(1777)に編纂され、明治39年(1906)に刊行された『校訂筑後志』にも「遺水原」の名で登場するが、ここでも15町四方とある。同書によると、豊氏の代に鑓水の畑50石と山林が御井町の極楽寺に寄進されたほか、かつては一帯が久留米藩士の銃砲の試射場になっていたという。『米府年表』には、寛政6年(1794)6月13日に三河国の浪人森川惣十郎が鑓水で火術を試したとある。なお、明和年間(1764～1772)頃の家老家の覚書である『在方諸覚書』にも、御井郡の野原として高良内村の鑓水野が挙げられているが、その規模は25町(約2.7km)四方となっており、前掲の2書とは異なる。

Ⅲ. 調査の記録

本調査地点の現況は更地だが、A区は北半が庭木畑、南半が雑木林で、B～E区は宅地だった。全体的に削平されている上に住宅建設時の盛土に覆われ、包含層を確認できたA区とE区東部を除けば、調査地点の大半で表土または旧表土の直下で地山に至る。以下、基本層序と検出遺構、出土遺物について調査区ごとに述べる。

(1) A区の調査

基本層序

A区は調査地点の南端に位置し、地表の標高は最も低い42.0mを測る。調査面積は581 m²である。

北西部は、地表約0.3～0.4mを①黄色土ブロックを含む黄褐色土の表土が覆い、直下の②厚さ0.1～0.2mの褐色土・黄色土ブロックを含む暗褐色土の包含層を経て、地山に至る。A区南部では、地表約0.15～0.2mを①暗灰黄色土の表土が覆い、直下に②厚さ0.05～0.1mの灰黄褐色土と黒褐色土が混じる包含層がみられる。南西部では包含層を経て地山に至るが、南東部ではさらに③明黄褐色土と灰黄褐色土が混じる間層を経て地山に至る。地山は、標高41.5～41.8mで検出し、標高41.25～41.35mから上層が明黄褐色土、下層が黄色土である。

検出遺構

A区で検出した主な遺構は、溝4条と土坑3基が挙げられる。以下、遺構ごとに述べる。

溝

SD1 (第5・6図、図版1～3・6)

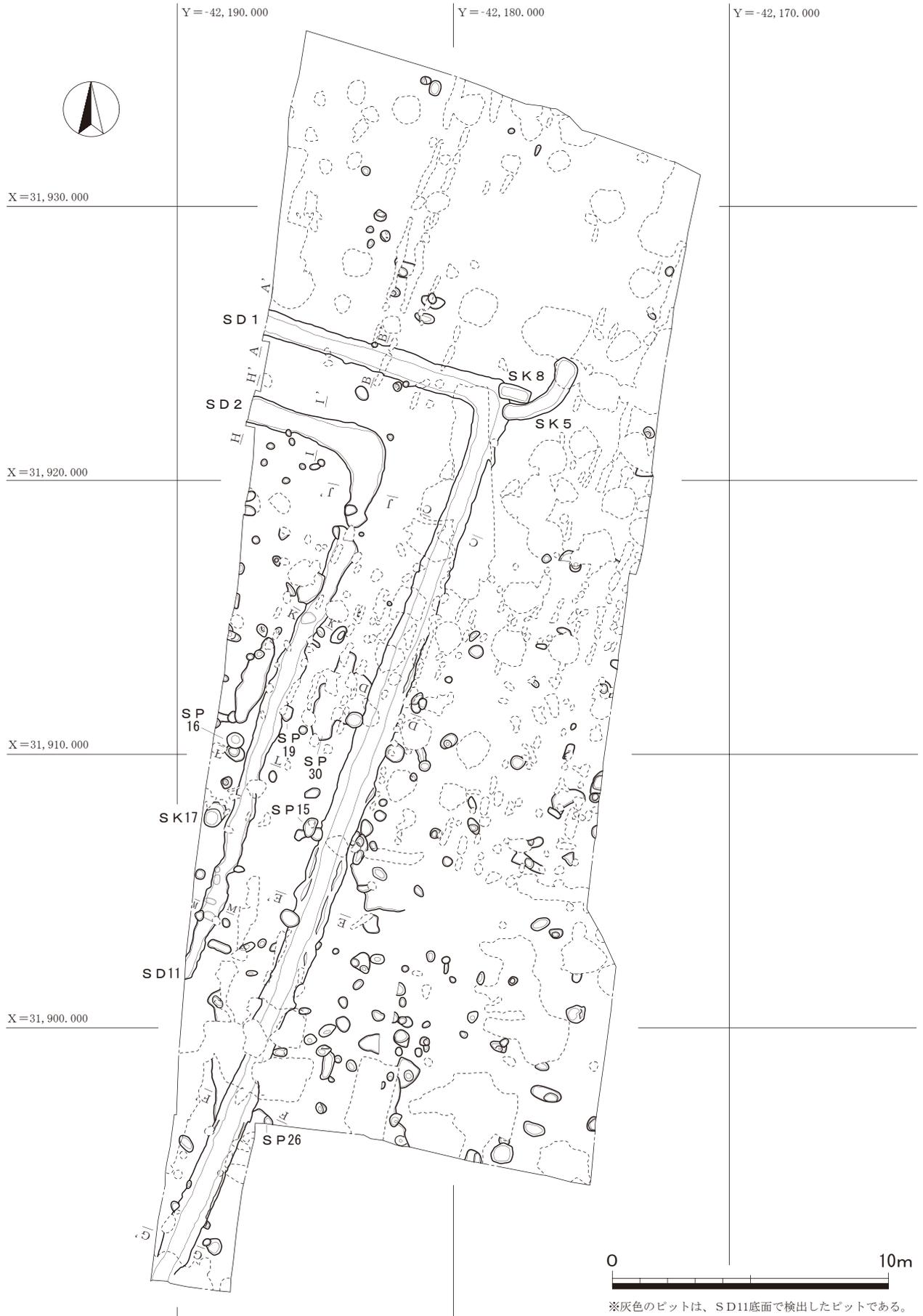
調査区中央部西壁から南西部隅で検出した溝である。走行方位は、東西方向にN-73°-W、南北方向にN-20°-Eで、調査区中央部で89.5°屈曲する。検出したのは東西9.6m、南北35.3mで、両端は調査区外に延びる。溝の断面は角の丸い逆台形状を呈し、上端幅0.86～1.37m、下端幅0.5～0.87m、深さは最大で0.61mを測る。埋土は第6図のとおりで、褐色系や黄色系の埋土が占める。また、堆積状況から掘り返された様子が窺える。遺物は、土師器の小皿や瓶、須恵器鉢の口縁部、貿易陶磁器の青磁碗の細片、滑石製石鍋や打製石鏃、石錘といった石製品などが出土した。

SD2 (第5・7図、図版1・2・7)

調査区中央部西寄り検出した溝である。走行方位は、東西方向にN-72°-W、南北方向にN-17°-Eで、88.8°屈曲する。検出したのは東西5.3m、南北3.58mで、西端は調査区外に延びる。上端幅0.69～0.61m、下端幅0.59～1.58m、深さは最大で0.16mを測る。埋土は第7図のとおりで、にぶい褐色土と灰黄褐色土で二分される。出土遺物は、土師器の坏や細片のみである。

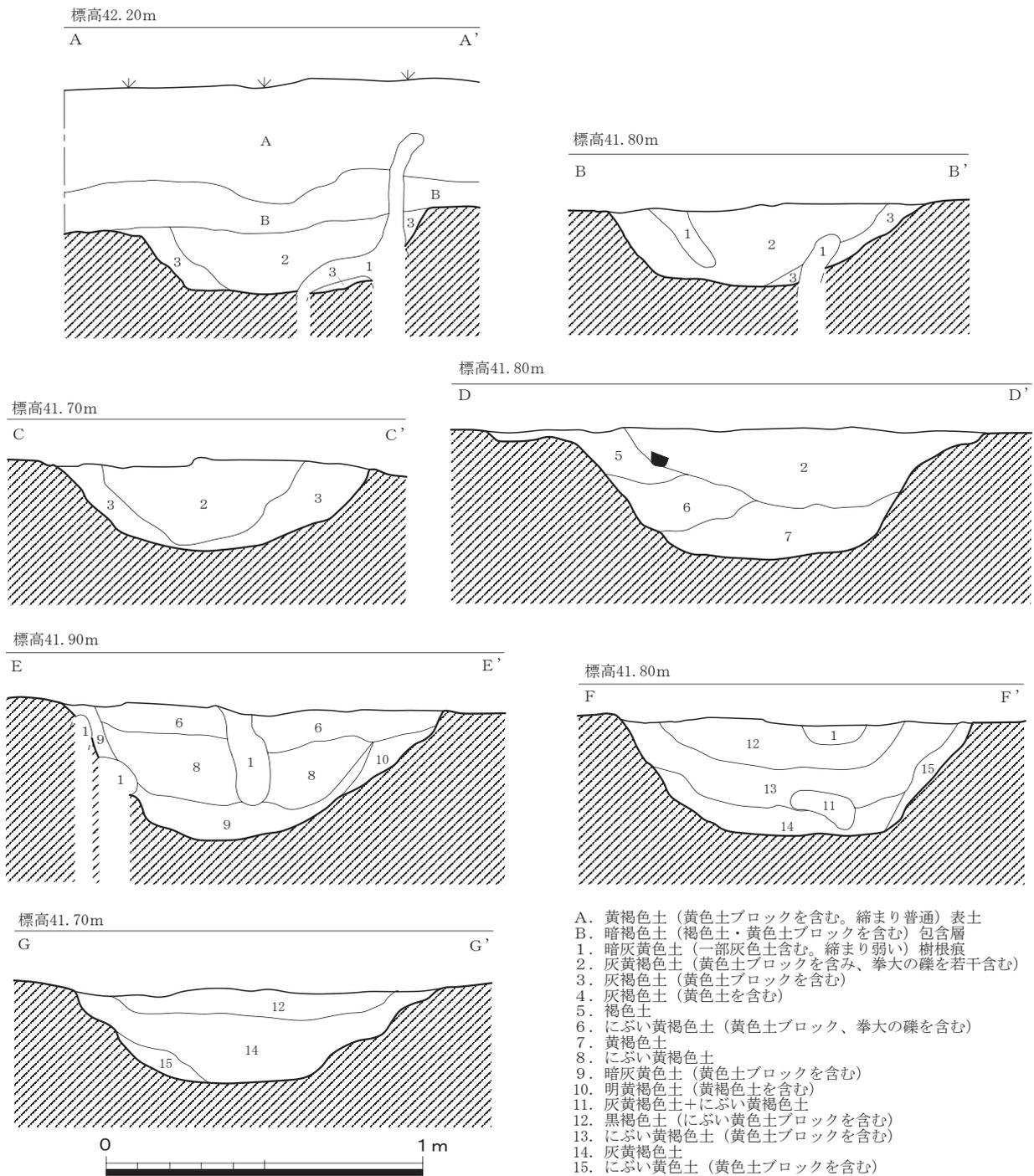
SD11 (第5・7図、図版2・6)

調査区中央部西寄り検出した溝である。走行方位はN-17°～25°-Eで、緩やかに蛇行する。検出したのは長さ17.5mで、南端は調査区外に延びる。上端幅0.46～1.05m、下端幅0.28～0.73m、深さは最大で0.22mを測る。埋土は、暗褐色土や黄色ブロック土を含む灰褐色土だった。遺物



第5図 A区遺構配置図 (1/200)

III. 調査の記録



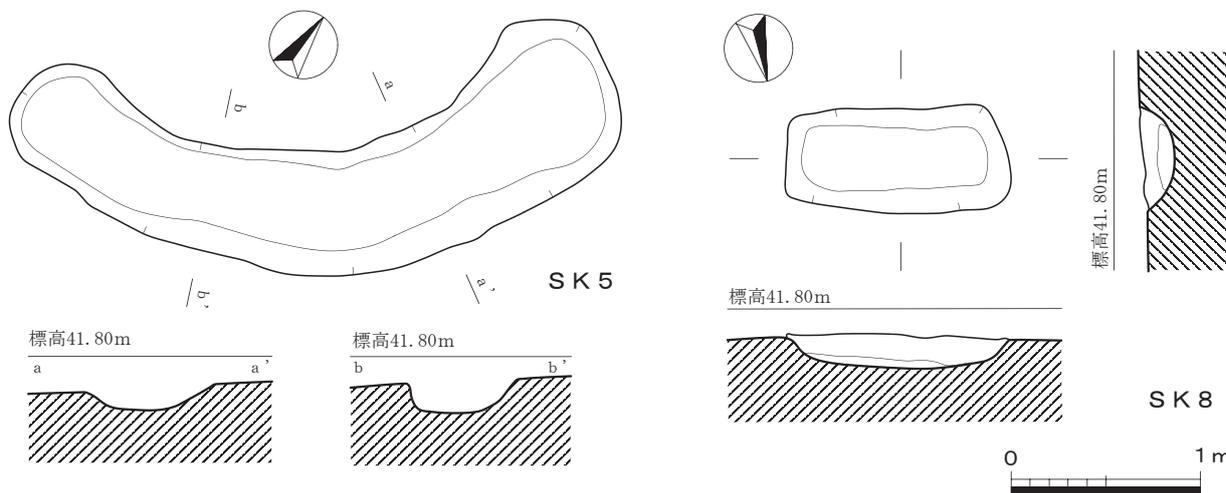
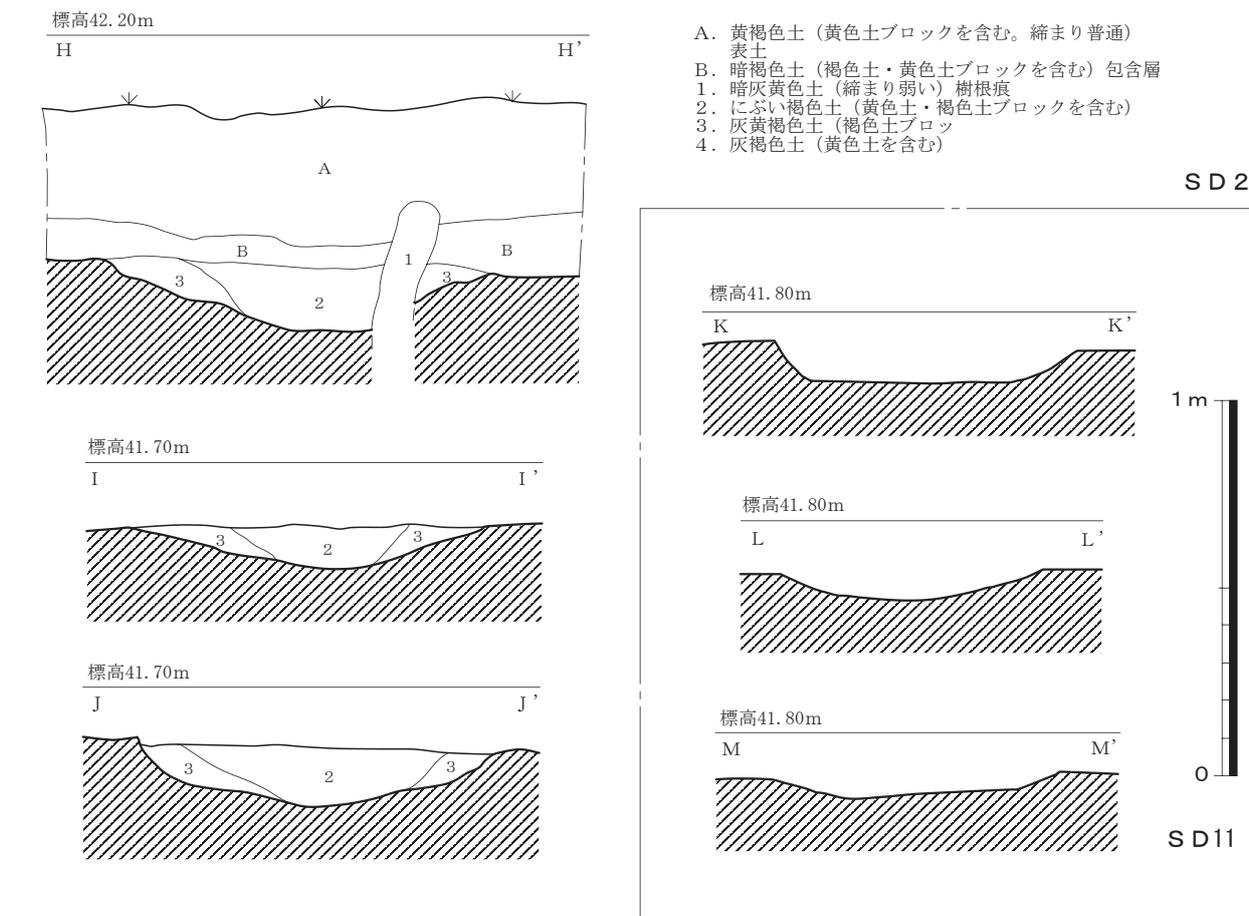
第6図 SD1土層図 (1/20)

は、土師器の坏や小皿などと、黒曜石の剥片が出土した。

土坑

SK5 (第7図、図版7)

調査区北部中央で検出した、SD1に後出する土坑である。弧を描く歪な小判形の平面を有し、長さ3.21m、幅1.23m、深さは最大で0.16mを測る。埋土は、灰色土ブロックを含む明黄褐色土だった。出土遺物は、被熱した縄文土器の細片と白磁の細片各1点のみである。



第7図 SD 2 土層図、SD 11 断面図、SK 5・8 実測図 (1/20、1/40)

SK 8 (第7図、図版7)

調査区北部中央で検出した、SD 1 に後出する土坑である。隅丸方形の平面を有し、長さ 1.13m、幅 0.68m、深さは最大で 0.19m を測る。埋土は、黄色土ブロックを含む灰褐色土だった。遺物は、土師器の細片が 1 点出土したのみである。

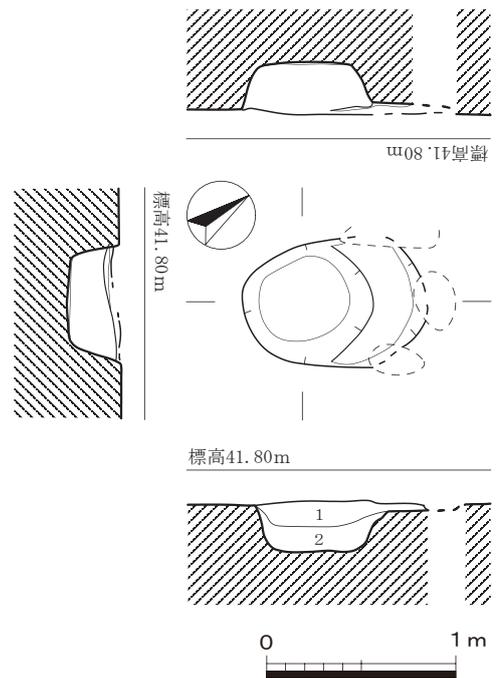
SK17 (第8図、図版7)

調査区中央部西端で検出した土坑である。楕円形の平面を有し、長さ 0.98m、幅 0.68m、深さは最大で 0.28mを測る。埋土は第8図のとおりで、暗褐色土・黄色土ブロックを含むにぶい黄褐色土と、灰黄褐色土・黄色土ブロックを含む黄褐色土で二分される。出土遺物は無い。

出土遺物 (第9・10図、第1表、図版9～11)

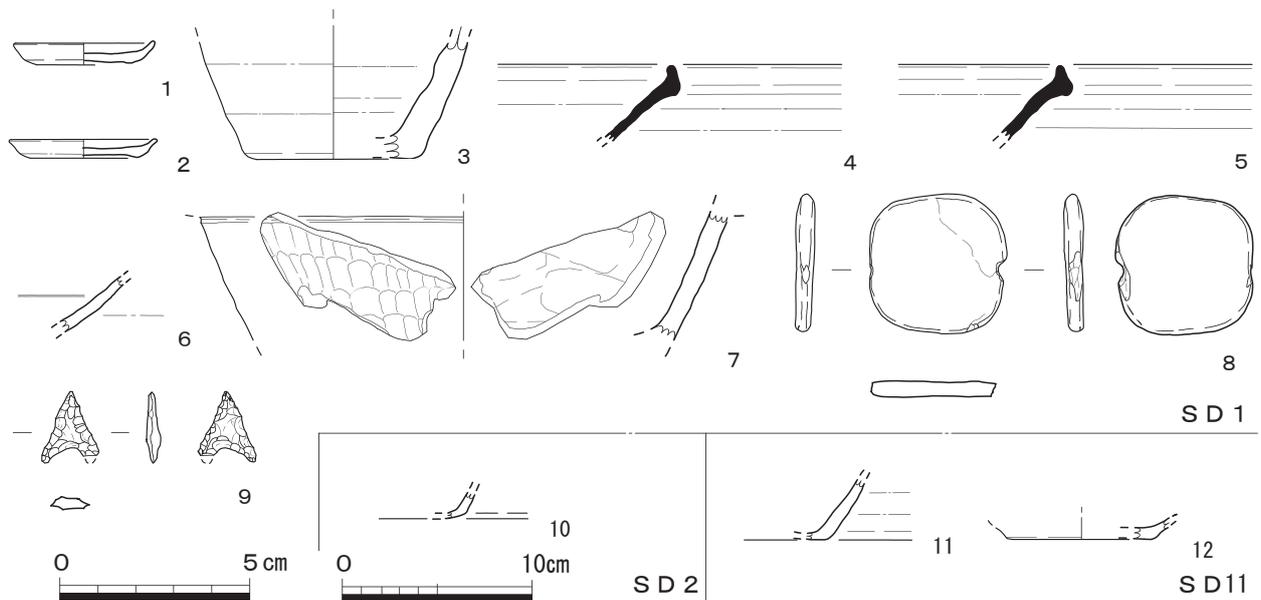
A区の遺物総量はパンコンテナー0.5箱分である。遺物として、縄文土器や中世の土師器と須恵器、近世から近代の土師器や陶磁器、打製石鏟や石匙、滑石製石鍋などの石製品、鉄製品が挙げられる。また、表土や攪乱からは縄文土器の細片や土師器の細片、近世から近代にかけての陶磁器片、黒曜石や安山岩の剥片が出土した。個々の法量や色調などの詳細については、第1表を参照願いたい。以下、各遺物の特徴について簡単に補足する。

1～9は、SD1出土遺物である。1と2は土師器の小皿で、底部に糸切りの痕跡が明瞭に残る。3は土師器の壺で、二次被熱による表面の剥離が著しい。4と5は須恵器鉢の口縁部である。同じ場所から出土したが、口縁の形状や色調が異なることから、別個体と判断した。6は貿易陶磁器の細片で、内外面ともに気泡が目立つ。7の滑石製石鍋は、外面の一部に黒色の付着物が見られる。8の石製品は片岩製で、外縁の2ヶ所に打欠が見られ、石錘と考えられる。9は、混入とみられる

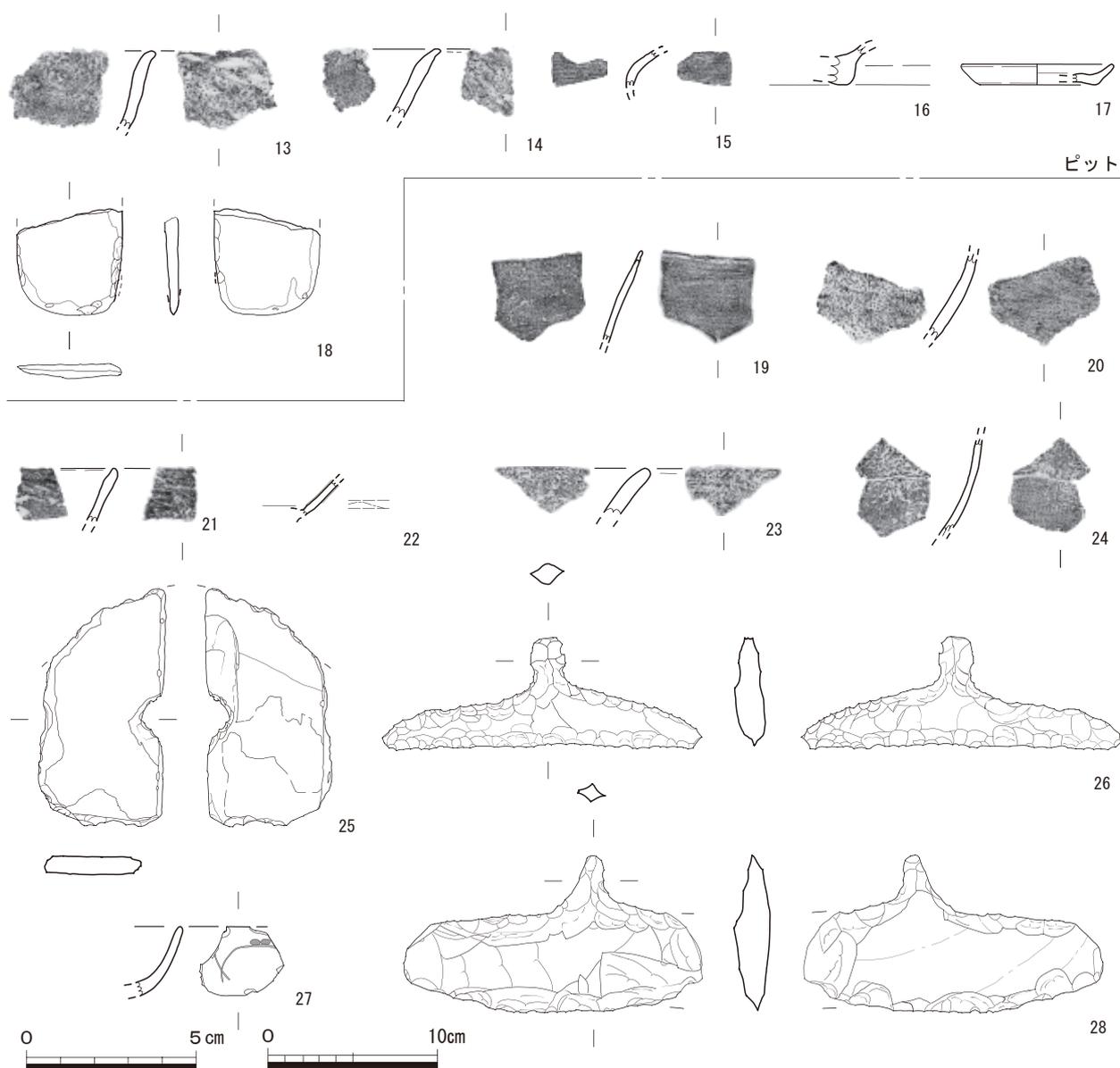


1. にぶい黄褐色土 (暗褐色土ブロックと黄色土ブロックを含む)
2. 黄褐色土 (灰黄褐色土ブロックと黄色土ブロックを含む)

第8図 SK17 実測図 (1/40)



第9図 A区出土遺物実測図1 (1/4、1/2)



第10図 A区出土遺物実測図2 (1/4, 1/2)

打製石鏃で安山岩製である。10はSD2出土の土師器坏で、細片だが底部とみられる。11と12はSD11出土遺物で、いずれも細片である。11の土師器坏、12の土師器小皿ともに糸切り底である。13~18はピットからの出土遺物である。13~16は縄文土器の細片で、13と14は口縁部、16は底部である。13と14は別々のピットから出土したが、調整や色調が類似しており、同一個体の可能性がある。17は内外面ともにミガキを有し、断面の湾曲から、浅鉢の頸部とみられる。17は土師器の小皿で、回転糸切りの痕跡がみられる。18は片岩製で刃部が見られることから、磨製石斧と考えられる。ただし外面は剥離が著しい。19~28は、攪乱や試掘トレンチ埋土、遺構面、表土からの出土遺物である。19~21・23・24は縄文土器の細片で19・21・23は口縁部である。25は片岩製で打欠が見られることから、石製品と考えられる。ただし全形が明らかではなく、用途も不明である。26と28は安山岩の石匙である。いずれも風化しており、折損した箇所がある。

III. 調査の記録

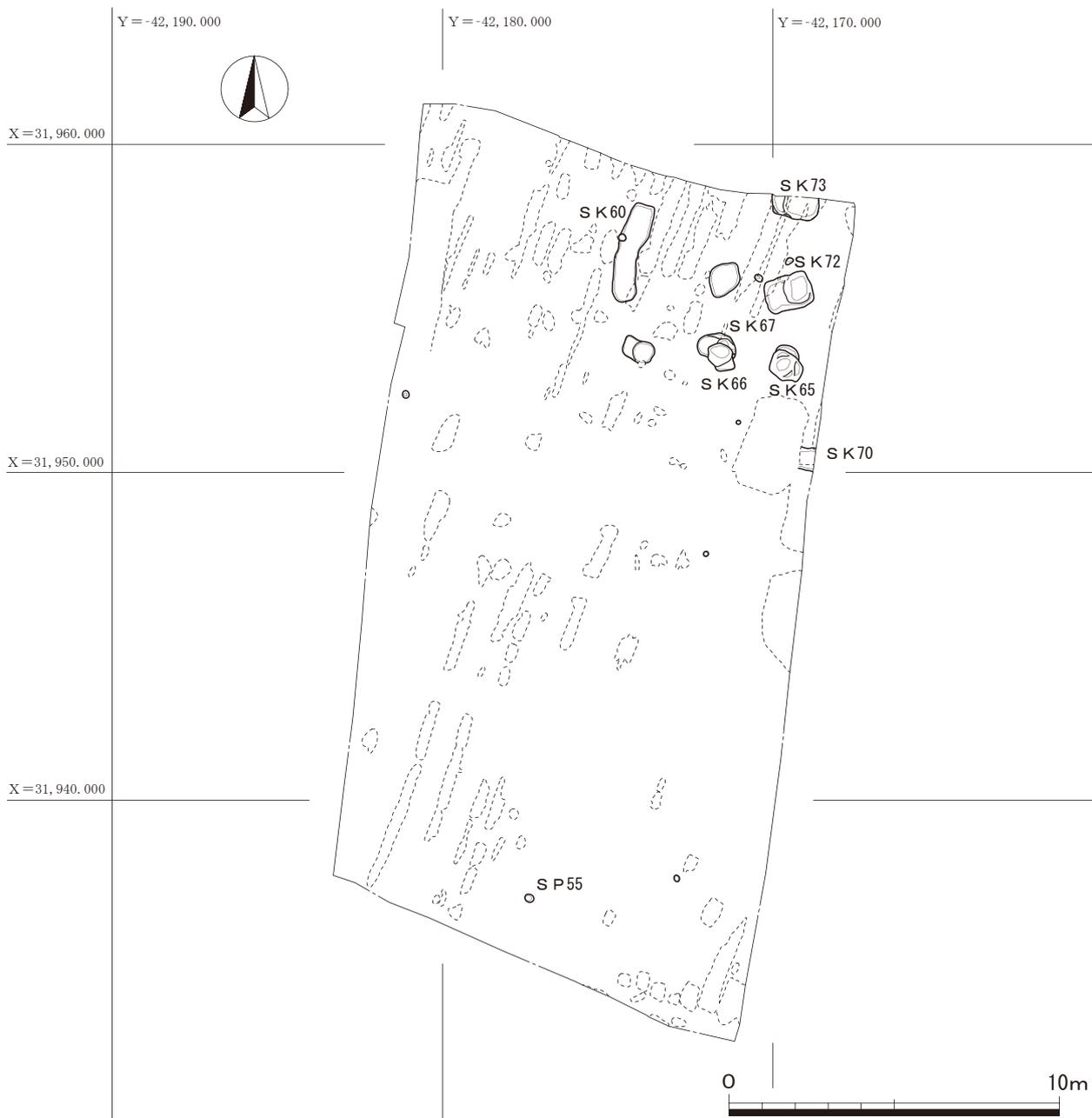
第1表 A区出土遺物観察表

遺物 No	出土 遺構	材質	器種	法量 (cm)			色調		調整 (文様)			胎土 重量	備考	登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)	外面 (釉薬)	内面 (胎土)	外面	内面	底部			
1 第9図	SD1	土師器	小皿	[7.2]	[5.0]	1.2	にぶい褐色	にぶい橙色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ ナデ・摩耗	糸切り痕 摩耗	精良 (金雲母を含む)		201802 00001
2 第9図	SD1	土師器	小皿	[7.6]	[5.6]	1.0	にぶい褐色	橙色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	糸切り痕 摩耗	精良 (金雲母を含む)	底部焼き歪む。	201802 000046
3 第9図	SD1	土師器	壺	—	[8.2]	(7.1)	淡黄色		回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	摩耗	やや精良 (砂粒を含む)	二次被熱による摩耗 著しい。	201802 000006
4 第9図	SD1	須恵器	鉢	—	—	(4.0)	灰黄褐色～ 浅黄褐色	橙色～ 灰黄色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	—	精良 (微砂粒を含む)	二次被熱による摩耗 著しい。	201802 000009
5 第9図	SD1	須恵器	鉢	—	—	(4.0)	黄灰色～ 灰白色	にぶい黄色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良 (微砂粒を含む)		201802 000010
6 第9図	SD1	貿易陶磁器	碗	—	—	(2.9)	オリーブ灰色 (釉薬)	灰黄色 (胎土)	回転ナデ	回転ナデ 沈線	—	精良 (黒色粒子を含む)	青磁か。 気泡が生じる。	201802 000004
7 第9図	SD1	石製品	石鍋	—	—	(6.8)	黒色	灰褐色	ケズリ痕	ケズリ痕	—	(136.2)g	鏝を有する。外面一 部にスス付着。	201802 000011
8 第9図	SD1	石製品	石錘	7.2	7.4	1.0	灰黄褐色		縁の一部 に敲打痕	—	—	95.45g	角閃片岩製。	201802 000007
9 第9図	SD1	石製品	石鏝	1.9	1.6	0.35	黄灰色		敲打痕	—	—	0.6g	安山岩製。摩耗	201802 000002
10 第9図	SD2	土師器	坏	—	—	(1.4)	にぶい褐色	橙色	回転ナデ 摩耗	摩耗	摩耗	精良 (金雲母を含む)	摩耗著しい。	201802 000012
11 第9図	SD11	土師器	坏	—	—	(5.2)	にぶい褐色～橙色		回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	糸切り痕	精良(微砂粒・金雲 母を含む)	摩耗著しい。	201802 000018
12 第9図	SD11	土師器	小皿	—	[7.2]	(1.1)	にぶい褐色		回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕	精良 (金雲母を含む)		201802 000019
13 第10図	SP19	縄文土器	鉢	—	—	(4.6)	灰黄色	灰褐色	斜め方向 の調整	横方向 の調整	—	砂粒を多く含む	粗製土器。14と類似。	201802 000023
14 第10図	SP26	縄文土器	鉢	—	—	(4.0)	灰黄褐色	浅黄褐色 ～灰色	斜め方向 の調整	縦方向 の調整	—	砂粒を多く含む	粗製土器。13と類似。	201802 000029
15 第10図	SP30	縄文土器	鉢	—	—	(2.3)	浅黄褐色	にぶい 黄褐色	横方向のミガキ		—	精良(細砂粒・金雲 母を含む)	精製土器	201802 000030
16 第10図	SP15	縄文土器	浅鉢	—	—	(2.4)	にぶい 黄褐色	にぶい褐色	摩耗	横ナデか 摩耗	摩耗	砂粒・金雲母を 多く含む		201802 000021
17 第10図	SP16	土師器	小皿	[8.8]	[6.8]	1.3	にぶい 黄褐色	にぶい褐色	回転ナデ	回転ナデ	糸切り痕	精良 (金雲母を含む)	底部焼き歪む。	201802 000022
18 第10図	SP30	石製品	磨製石斧	(6.3)	(6.2)	(0.9)	灰色		剥離	剥離	刃部あり	(51.65)g	片岩製。剥離著しい。	201802 000031
19 第10図	攪乱	縄文土器	鉢	—	—	(5.4)	明黄褐色	にぶい 黄褐色	ミガキか 摩耗著しい	横方向 の調整	—	精良(細砂粒・金雲 母を含む)	精製土器。波状口縁。	201802 000015
20 第10図	攪乱	縄文土器	細片	—	—	(5.2)	淡黄褐色		ナデ 摩耗	ナデ	—	砂粒を多く含む	粗製土器	201802 000016
21 第10図	攪乱	縄文土器	鉢	—	—	(3.2)	淡黄褐色	暗灰黄色	摩耗	横ナデか 摩耗	—	精良(細砂粒・金雲 母を含む)	粗製土器	201802 000028
22 第10図	攪乱	貿易陶磁器	碗	—	—	(2.1)	灰色 (釉薬)	灰黄色 (胎土)	回転ケズリ 回転ナデ	回転ナデ 沈線	—	精良 (黒色粒子を含む)	外面一部露胎	201802 000036
23 第10図	遺構面	縄文土器	鉢	—	—	(2.3)	浅黄色	灰黄色	摩耗	摩耗	—	微砂粒を多く含む	粗製土器	201802 000033
24 第10図	遺構面	縄文土器	鉢	—	—	(5.8)	にぶい褐色～ 灰オリーブ色	灰黄褐色～ にぶい黄褐色	横方向 の調整	摩耗	—	精良(微砂粒・金雲 母を含む)	精製土器か	201802 000034
25 第10図	遺構面	石製品	不明製品	(14.1)	(7.3)	1.1	淡黄色～緑灰色		一部に 敲打痕	一部に 敲打痕	—	(157.9)g	結晶片岩製。折損	201802 000035
26 第10図	試掘 トレンチ	石製品	石匙	3.3	(9.5)	0.9	灰黄色		敲打痕 折損	—	—	(12.8)g	安山岩製。摩耗	201802 000032
27 第10図	表採	染付	碗	—	—	(4.1)	無色透明 染付	灰白色 (胎土)	草花文	無文	—	精良	肥前系。17世紀末～ 18世紀	201802 000037
28 第10図	表採	石製品	石匙 (未成品)	4.7	(8.8)	1.1	灰色		敲打痕 折損	—	—	(35.8)g	安山岩製。摩耗	201802 000038

(2) B区の調査

基本層序

B区は調査地点の中央部南寄りに位置する。南に向かって傾斜しており、北端は標高 43.5m、南端は標高 42.1mを測る。調査面積は 323 m²である。現地表面は調査区南端を除き①住宅建設時の盛土が約 1.1m覆い、厚さ 0.2～0.3mの②礫や炭粒を含むオリーブ褐色土、③厚さ 0.1～0.3mの②灰オリーブ色土と明黄褐色土が混じる間層を経て、地表下 0.4～1.7m、標高 41.5～41.8mの地山面に至る。地山は、標高 41.6mから上層が明黄褐色土、下層がにぶい黄褐色土である。



第11図 B区遺構配置図 (1/200)

検出遺構

B区で検出した遺構は、土坑6基とピット11基である。ほかに近代の畝跡や住宅取り壊し時の廃材廃棄坑といった攪乱が多数見られた。以下、遺構ごとに述べる。

土坑

SK60 (第12図、図版7)

調査区北部中央で検出した土坑である。弧を描く隅丸方形の平面を有し、中央部は若干くびれる。長さ3.06m、幅0.62~0.84m、深さ0.15mを測る。埋土は第12図のとおりで、黄色土・灰色土ブロックを含む黒褐色土の層と、灰褐色土と黒色土ブロックを含む浅黄色土が混じる層に二分される。出土遺物は、土師器甕の胴部片と播鉢とみられる近世陶器の細片各1点のみである。

S K65 (第 12 図、図版 7)

調査区北部東端で検出した土坑である。歪な隅丸方形の平面を有し、長さ 1.09m、幅 0.83m、深さ 0.36m を測る。埋土は第 12 図のとおりで、黒褐色土・黄色土ブロックを含む灰黄褐色土と黒褐色土・灰色土ブロックを含む明黄褐色土で二分される。遺物は、縄文土器の細片 2 点と黒曜石の剥片 1 点が出土した。

S K66 (第 12 図、図版 7・8)

調査区北部東寄り検出した土坑である。歪な平面形を有し、長さ 1.01m、幅 0.77m、深さ 0.30m を測る。埋土は、黒褐色土・黄橙色土ブロックを含むにぶい褐色土だった。出土遺物は無い。

S K67 (第 12 図、図版 8)

調査区北部東寄り検出した土坑である。遺構の中心部は畑の畝跡や S K66 に削平されているが、楕円形の平面を有するとみられる。長さ 1.20m、幅 0.83m、深さ 0.24m を測る。埋土は、黄色土ブロックを含む黒褐色土だった。遺物は出土しなかった。

S K70 (第 12 図、図版 8)

調査区東部壁際で検出した土坑である。遺構の西端は攪乱に削平され、東部は調査区外に及ぶため、検出したのは長さ 0.46m のみである。幅 0.73m、深さ 0.20m を測る。埋土は、黄色土ブロックを含む黒褐色土だった。出土遺物は無い。

S K72 (第 12 図、図版 8)

調査区北部東寄り検出した土坑である。畑の畝跡やピットが後出する。隅丸方形の平面を有し、長さ 1.46m、幅 1.08m、深さ 0.36m を測る。埋土は、黒褐色土ブロックと黄色土ブロックを含む黄褐色土だった。遺物は出土していない。

S K73 (第 12 図、図版 8)

調査区北東部壁面で検出した土坑である。畑の畝跡が後出する上に、遺構の北部は調査区外に及ぶが、隅丸方形に近い平面形を有するとみられる。長さ 1.43m、幅 0.74m 以上、深さ 0.48m を測る。埋土は第 10 図のとおりで、灰オリーブ色土と黄色系の土で二分される。出土遺物は無い。

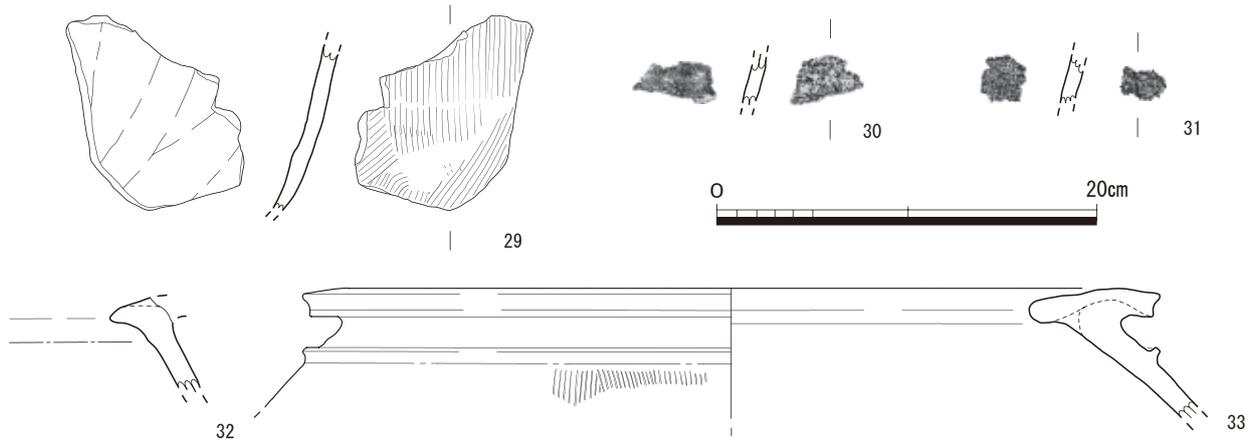
ピット

調査区全体に散らばり、合計 7 基を検出した。円形または歪な円形の平面を有し、直径 0.18～0.29m、深さ 0.06～0.45m を測る。埋土は、いずれもにぶい褐色土だった。遺物は、S P55 から土師器の細片と近代の染付細片、緑青で覆われた金属片が各 1 点出土したのみである。

出土遺物 (第 13 図、図版 12)

遺物総量はビニール袋 2 袋分のみである。出土したのは、縄文土器の細片や弥生土器の甕棺の口縁部、古代の土師器甕の胴部、中世から近世の所産とみられる土師器の細片、近世から近代の陶磁器、鉄滓、黒曜石や安山岩の剥片である。これらのうち図示できたのは、S K60 出土の土師器甕の胴部 (29)、S K65 出土の縄文土器の細片 (30・31)、そして表土剥ぎの際に住宅盛土から出土した甕棺の口縁部 (32・33) のみである。個々の遺物の詳細については、第 2 表を参照願いたい。

III. 調査の記録



第13図 B区出土遺物実測図(1/4)

第2表 B区出土遺物観察表

遺物 No.	出土遺構	材質	器種	法量 (cm)			色調		調整 (文様)		胎重 土量	備考	登録番号
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (高さ)	外面 (軸葉)	内面 (胎土)	外面	内面			
29 第13図	SK60	土師器	甕か	—	—	(10.3)	橙色		刷毛目	ケズリ	細砂粒を含む		201802 000039
30 第13図	SK65	縄文土器	鉢	—	—	(2.9)	にぶい黄橙色		摩耗	横ナデ	砂粒を含む		201802 000040
31 第13図	SK65	縄文土器	細片	—	—	(2.4)	灰褐色	にぶい黄橙色	斜め方向の調整	横方向の調整	細砂粒・金雲母を含む		201802 000041
32 第13図	盛土	弥生土器	甕棺	—	—	(5.0)	黄橙色	橙色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ	微砂粒を含む	K II c~K III b式	201802 000043
33 第13図	盛土	弥生土器	甕棺	[40.1]	—	(6.9)	浅黄橙色	黄橙色	回転ナデ 刷毛目・突帯	回転ナデ ナデ	微砂粒を含む	K III a~K III b式	201802 000042

(3) C区の調査

基本層序

C区は、調査地点の中央部に位置する。調査面積は80㎡である。地表約0.5mを①集合住宅建築時の盛土が覆い、厚さ0.1~0.2mの②黄色土ブロックを含む灰色土と暗褐色土の整地を経て③生木を含む灰褐色土~暗褐色土の旧表土が0.3~0.4m見られる。旧表土は、調査区北東部では各0.2mの灰褐色土と暗褐色土の層に二分されるほか、調査区西部は旧表土の直下で地山に至る。調査区東部では、厚さ0.1mの④鉄分を含む褐色土の間層を挟み、地表下1.0~1.15m、標高41.6~42.0mの地山に至る。地山は黄色粘質土で、西に向かって傾斜している。

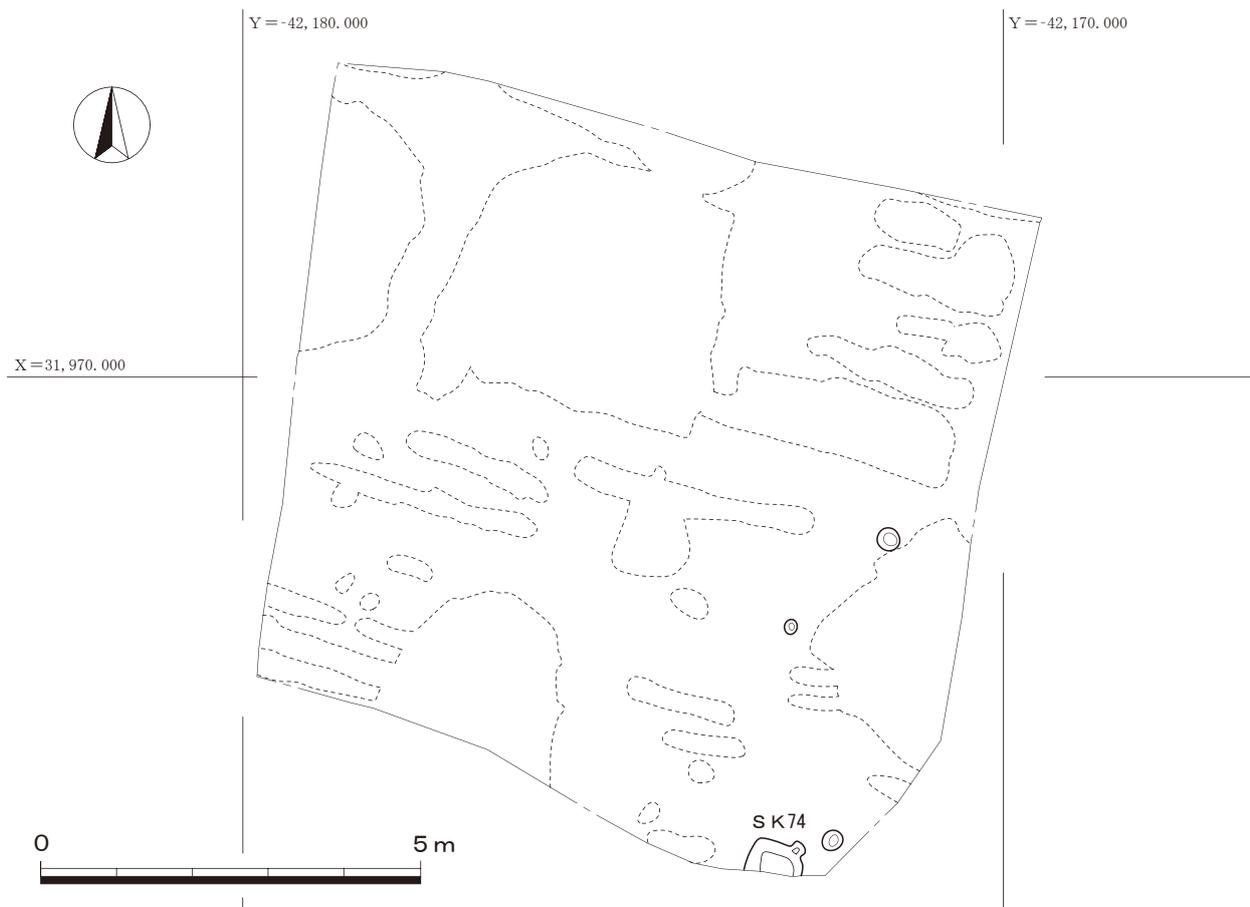
検出遺構

検出遺構は第14図のとおりで、土坑1基とピット3基のみである。調査区の広範囲は、現代の廃棄土坑や畝跡などの攪乱が占める。

土坑

SK74 (第15図、図版5)

調査区南東隅で検出した土坑である。隅丸の台形に近い平面を有し、遺構の南部は調査区外に及ぶ。検出したのは長さ0.75m、幅0.56mのみで、深さ0.18mを測る。北東隅に凸部を確認したが、別個のピットをまとめて掘削した可能性がある。埋土は、暗オリーブ色土を含む黒褐色土だった。遺物は出土していない。



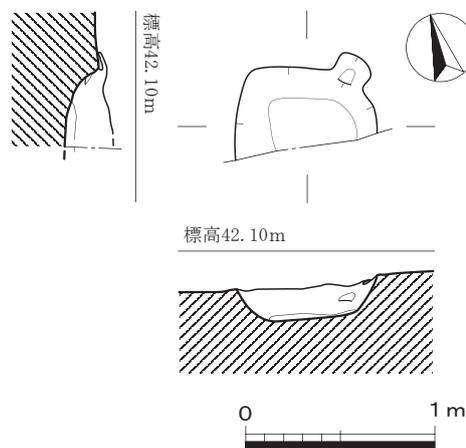
第14図 C区遺構配置図 (1/100)

ピット

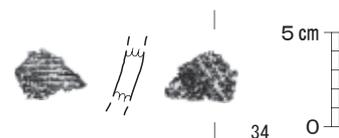
調査区の南東部に散らばり、円形の平面を有する。直径 0.16~0.31m、深さ 0.08~0.29mを測り、埋土は暗褐色土だった。いずれも出土遺物は無い。

出土遺物 (第16図、図版12)

C区の遺物総量はビニール袋1袋分で、遺構面から縄文土器の細片3点と土師器の細片1点、黒曜石の剥片1点が出土したのみである。このうち図示できたのは、縄文土器1点(第16図34、201802-000044)だけである。鉢の胴部片とみられる細片で、残存高2.8cm、厚さ0.9cmを測る。外面は褐色、内面は浅黄色を呈し、外面には斜め方向の調整、内面には横方向の調整が観察できるが、いずれも被熱による摩耗が著しい。胎土は細砂粒を含む。



第15図 SK74 実測図 (1/40)



第16図 C区出土遺物実測図 (1/4)

(4) D区の調査

基本層序

D区は調査地点の北部に位置し、調査面積は101 m²である。地表約0.1mを①アスファルト敷設

III. 調査の記録

時の碎石が覆い、②礫や灰色ブロック土を含む
 橙色砂礫土が約 0.25～0.3mみられ、厚さ 0.25
 ～0.3mの③灰褐色土を含む灰オリーブ土を経
 て、地表下 0.4～0.6m、標高 42.1～42.3mで地
 山面に至る。地山は灰白色粘質土である。

検出遺構

検出遺構は第17図のとおりで、現代の廃棄
 土坑や樹根痕などの攪乱のみである。

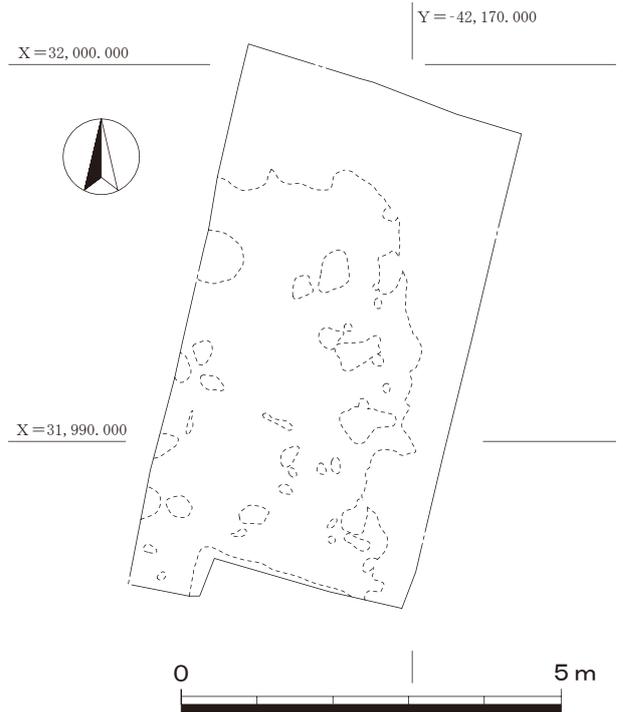
出土遺物

遺物総量はビニール袋1袋にすぎない。遺物
 として、攪乱から出土した、近世以降の陶磁器
 や黒曜石の剥片が挙げられる。

(5) E区の調査

基本層序

E区は調査地点の北端に位置し、標高は最も
 高い 43.4～43.5mを測る。調査面積は 75 m²である。地表約 0.1～0.3mを①碎石を多く含むオリ
 ブ灰色真砂土が覆い、その下に②瓦礫を若干含む浅黄橙色からにぶい褐色の真砂土が約 0.55～0.7m
 見られる。真砂土の直下には、厚さ 0.05～0.2mの③黄褐色土ブロックを含む黒褐色土がある。この
 層は調査区北壁で真砂土が混じるほか、表土剥ぎ時にジュースのスチール缶が出土したことから、
 現代の旧表土と考えられる。旧表土の下層には、④黄褐色土・オリーブ色土ブロックを含む黒褐色
 土が 0.35～0.5m見られる。この黒褐色土は下半に小石が集中し、比較的締まりが弱い傾向にある。



第17図 D区遺構配置図 (1/200)



第18図 E区遺構配置図 (1/100)

また、植木痕の埋土と同じことから、旧表土直下の耕作土と考えられる。なお調査区壁面の一部では、黒褐色土の包含層が確認できる。これらの層の直下、地表下 1.0~1.15m、標高 41.6~42.0m で地山面に至る。地山は、標高 41.15m から上層が黄褐色土、下層がにぶい黄褐色土である。

検出遺構

E 区では、溝 2 条とピット 21 基を検出した。以下、遺構ごとに述べる。

溝

S D 75 (第 18・19 図、図版 8)

調査区東端で検出した、半円形の断面を有する溝である。遺構の両端と東半分は調査区外に及び、検出したのは 6.16m のみである。上面の最大幅は 0.68m、底面の幅は 0.38~0.42m を測り、深さは南端で 0.20m、北端で 0.11m を測る。走行方位は N-17~22° - E で、緩やかに蛇行しているようにも見える。埋土は第 18 図のとおりで、黒色土と暗褐色土で二分される。遺物は、土師器の細片が 1 点のみ出土した。

S D 78 (第 18・19 図、図版 8)

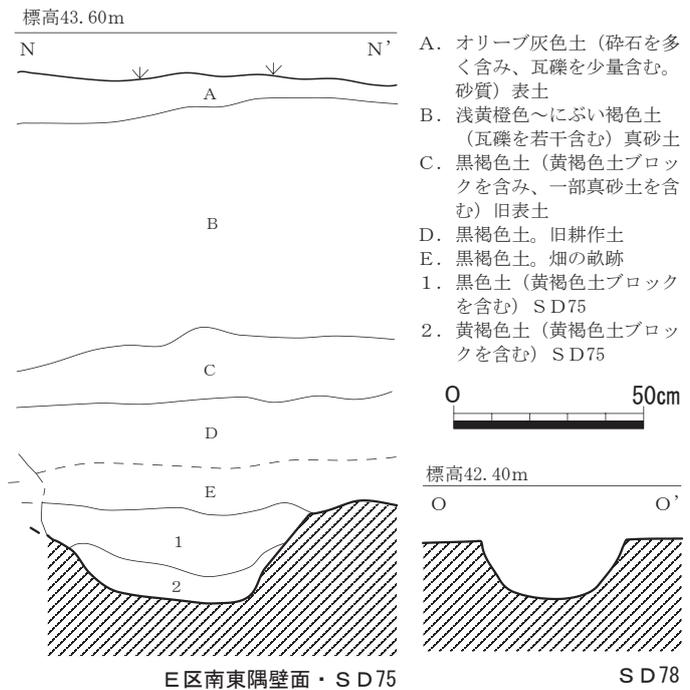
調査区西端で検出した、逆台形の断面を有する溝である。遺構の両端は調査区外に及び、検出したのは 4.53m のみである。上面の幅は 0.36~0.42m、底面の幅は 0.16~0.22m を測り、深さは南端で 0.16m、北端で 0.19m を測る。走行方位は N-12~15° - W で、緩やかに蛇行しているようにも見える。埋土は、オリーブ色土ブロックと黄色土ブロックを含む黒褐色土だった。出土遺物は、打製石鏃 1 点のみである。

ピット

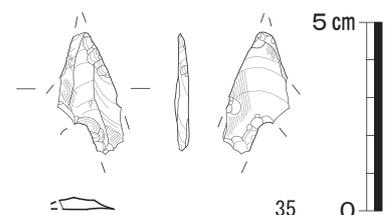
調査区全体で検出した。平面形は定まらず、法量も直径 0.14~0.92m、深さ 0.04~0.26m と多様である。埋土は、いずれも灰褐色土だった。出土遺物は無い。

出土遺物 (第 20 図、図版 12)

E 区の遺物総量はビニール袋 1 袋分のみである。既に述べた遺物のほかに、耕作土や包含層から弥生土器や土師器、近世以降の染付、安山岩製の剥片が出土した。いずれも細片で、図示できたのは S D 78 で出土した打製石鏃 (第 20 図 35、201802-000045) のみである。いわゆる剥片鏃で、先端と両方の基部が欠損しており、残存長 3.3 cm、残存幅 1.7 cm、厚さ 0.4 cm、重さ 1.55 g を測る。石材は黒曜石である。



第 19 図 E 区南東隅壁面土層図、S D 78 断面図 (1/20)



第 20 図 E 区出土遺物実測図 (1/2)

IV. 総 括

調査面積 1,160 m²に対して遺構は希薄で、主要遺構は溝 5 条と土坑 11 基のみである。出土遺物も比較的少なく、総量はパンコンテナ 1 箱にも満たない。従って、限られた情報に基づいたまとめとなってしまいが、以下、発掘調査の成果を年代ごとに述べる。

(1) 縄文時代～古代の遺構と遺物について

今回の発掘調査で最古の遺構と遺物の年代は、縄文時代まで遡る。S K65 やピット、後世の遺構、遺構面、表土から、土器片や打製石鏃、石匙といった石製品、さらに黒曜石や安山岩の剥片が出土した。縄文土器は全て細片で、しかも摩耗が著しい。いずれも明確な文様は皆無だが、厚さや傾き、波状口縁を有するとみられる口縁部片やミガキを有する浅鉢片から、これらの年代は後期後葉から晩期に収まると考えられる。周辺では、鍬水古墳群で打製石鏃が出土したほか、西方の大木下遺跡(注1)と筑後国分寺跡(注2)、白川遺跡(注3)、正福寺遺跡(注4)、日渡遺跡(注5)と、東方の持田遺跡(注6)や丸深田遺跡(注7)、南方の甲塚遺跡(注8)で縄文時代後期から晩期の遺構や遺物が見つかっている。今回、これらの中に位置する鍬水遺跡で新たに遺構や遺物が見つかったことは、丘陵上の広範囲にわたって後期後半から晩期の遺跡が分布することを示唆する。

弥生時代の遺構は無かったが、住宅建築時の盛土から甕棺の口縁部が出土した。形状からK II c～K III b 式(注9)に比定できる。弥生時代の墓域で最も近い発見例は、鍬水遺跡から北に約 1.1 km の大銃場遺跡で、甕棺墓 4 基と箱式石棺墓 8 基の発見が伝わる(注10)。年代については、後期後半の成人棺から鉄器が出土したという。集落遺跡に目を向けると、筑後国分寺跡(注11)で中期末の堅穴住居が確認されている。今回出土した甕棺の年代は中期に比定でき、中期の墓域や集落の存在が想定される。

調査地点は鍬水古墳群に隣接するが、古墳時代の遺構や遺物は全く確認していない。

古代の確実な遺物は、S K60 から出土した土師器甕のみである。ただし、胴部の破片であることから、具体的な年代の特定は困難である。また、S K60 からは近世陶器の細片も出土しており、S K60 が古代の遺構か否かもはっきりしない。

(2) 中世の遺構と遺物について

中世の遺構や遺物は、A区で検出したSD 1・2・11 が注目できる。SD 2・11 は途切れているが、SD 1 に並走しており、同時期に併存した一連の溝と考えられる。また、SD 1・2 はほぼ直角に屈曲し、SD 1 には掘り返しの痕跡が見られる。このことから、SD 1・2・11 の用途として、屋敷の周囲を二重に巡る周溝などが考えられる。なお、SD 1 とSD 2・11 の間には土墨や築地、柵列などの設備の存在が想定されるが、削平が著しく今回の発掘調査では痕跡を確認できなかった。

出土遺物の年代は、SD 1・11 から出土した土師器小皿がいずれも糸切底で器高が低い点(注12)や、SD 1 から出土した須恵器鉢の口縁部が屈曲する点(注13)、SD 1 から貿易陶磁器の青磁碗や鏝を有する滑石製石鍋(注14)が出土した点から、12 世紀中頃から 14 世紀前半に収まる。従って、

SD 1・2・11の最終的な埋没は14世紀に比定でき、これらの溝は中世前半の屋敷の周溝と考えられる。SD 1・2・11周辺のピットや攪乱からは、糸切り底の土師器小皿や貿易陶磁器の白磁碗が出土したことから、溝に付属する施設の存在が示唆される。ただし調査区の削平が著しく、溝以外の遺構は確認していない。なお、B～E区では中世の以降や異物は確認していないが、平成11年の試掘調査時には天目碗が出土した土坑が検出されており、調査地点北西側にも遺構が存在する可能性がある。



第21図 中世の溝と周辺地形、字界の関係 (1/1,000)

今回検出したのは周溝の北東部分のみで、その内部は調査地点の西側に及ぶ。その規模の手がかりとして、調査区周辺の水路と字界が挙げられる。第21図のとおり、水路はSD 1・11の延長上を走っており、字界は調査地点の西側で複雑に屈折している。これらが屋敷の周溝を反映しているとすれば、周溝は南北約70m、東西約60mの規模が想定される。

周辺では、白川遺跡の12～13世紀の溝(注15)や、日渡遺跡(注16)と池田遺跡(注17)の14～15世紀の大溝が屋敷の存在を示している。これまで中世の遺跡が皆無だった鑑水遺跡だが、これらの遺跡と同様の屋敷が存在した可能性が高い。

(3) おわりに

これらの遺構に加えて、A～C区で土坑、E区で溝を検出したが、出土遺物が皆無もしくは僅かであることから、年代を明らかにすることはできない。

鑑水集落における発掘調査は、村下遺跡第1次調査(注18)と鑑水古墳群第1・2次調査(注19)以来、今回が4回目である。第II章でも触れたが、鑑水古墳群が築かれた古墳時代と伝承が残る江戸時代以降を除く時代における鑑水集落の様相は不明だった。また、高良内町における発掘調査も高良山南麓や低丘陵上の古墳と、高良山南麓の中世集落が中心だった傾向がある。今回、縄文時代と弥生時代、古代、そして中世の遺構や遺物を発見したことで、鑑水集落と高良内町の歴史的様相を復元するための、新たな資料を得ることが出来た。このことが今回の発掘調査の成果と言えるだろう。

【注】

(1) 久留米市史編さん委員会・編『目で見る久留米の歴史』 久留米市 昭和54年

IV. 総 括

- (2) 久留米市教育委員会『筑後国府跡・国分寺跡 昭和58年度発掘調査概要報告』久留米市文化財調査報告書第41集 昭和59年
久留米市教育委員会『筑後国府跡・国分寺跡 平成9年度発掘調査概要報告』久留米市文化財調査報告書第139集 平成10年
久留米市教育委員会『久留米市埋蔵文化財調査集報VI』久留米市文化財調査報告書第198集 平成16年
- (3) 久留米市教育委員会『日渡遺跡群IV 白川遺跡第3・4次調査』久留米市文化財調査報告書第224集 平成18年
- (4) 久留米市教育委員会『平成9年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第140集 平成10年
久留米市教育委員会『日渡遺跡群 正福寺遺跡第4～6次調査』久留米市文化財調査報告書第188集 平成15年
久留米市教育委員会『正福寺遺跡 一第8・10次調査』久留米市文化財調査報告書第229集 平成18年
久留米市教育委員会『日渡遺跡群 正福寺遺跡 第7次調査概要報告書』久留米市文化財調査報告書第233集 平成18年
久留米市教育委員会『平成18年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第248集 平成18年
久留米市教育委員会『日渡遺跡群VI 正福寺遺跡 一第7次調査—「遺構編」』久留米市文化財調査報告書第280集 平成20年
久留米市教育委員会『日渡遺跡群VII 正福寺遺跡第7次調査 編組製品遺物編』久留米市文化財調査報告書第380集 平成29年
- (5) 久留米市教育委員会『日渡遺跡』久留米市文化財調査報告書第85集 平成5年
久留米市教育委員会『日渡遺跡群III 日渡遺跡第3・4次調査』久留米市文化財調査報告書第203集 平成16年
久留米市教育委員会『正福寺遺跡・日渡遺跡群 一正福寺遺跡第9次調査—一日渡遺跡第5次調査—』久留米市文化財調査報告書第230集 平成18年
- (6) 久留米市教育委員会『平成10年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第150集 平成11年
久留米市教育委員会『久留米市埋蔵文化財調査集報III』久留米市文化財調査報告書第167集 平成12年
- (7) 平成5年(1993)に第1次調査(MFD-001/199329)を実施。未報告。
- (8) 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 一I—』昭和45年
- (9) 橋口達也「甕棺の編年の研究」福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI 中巻』昭和54年
- (10) 久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第2集』久留米市文化財調査報告書第36集 昭和58年
なお、平成元年に実施した大銃場古墳第1次調査(OTV-001/198935、未報告)の記録によると、これらの墳墓が発見されたのは昭和40年代初頭とのことである。
- (11) 久留米市教育委員会『筑後国府跡・国分寺跡 平成3年度発掘調査概要報告』久留米市文化財調査報告書第70集 平成4年
- (12) 楠瀬慶太「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相 一博多遺跡群の土師器編年—」九州考古学会『九州考古学』第82集 平成19年
- (13) 森田勉「中世須恵器」中世土器研究会・編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 平成7年
- (14) 木戸正寿「滑石製石鍋」中世土器研究会・編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 平成7年
- (15) 久留米市教育委員会『平成29年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第400集 平成30年
久留米市教育委員会『白川遺跡(久留米俘虜収容所跡) 一第11～17次発掘調査報告—』久留米市文化財調査報告書第403集 平成30年
久留米市教育委員会『白川遺跡(久留米俘虜収容所跡) 一第18次発掘調査報告—』久留米市文化財調査報告書第411集 平成31年
- (16) 久留米市教育委員会『日渡遺跡群III 日渡遺跡第3・4次調査』久留米市文化財調査報告書第203集 平成16年
- (17) 久留米市教育委員会『第12回くるめの考古資料展 一昭和61年度の発掘調査の紹介を兼ねて—』昭和62年
- (18) 平成2年(1992)に実施(MRS-001/199223)。未報告。
- (19) 久留米市教育委員会『平成8年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第127集 平成9年
久留米市教育委員会『鎌水古墳群 一第2次調査—』久留米市文化財調査報告書第138集 平成10年

写真図版



(1) A区調査前全景 (南から)



(2) B・C区調査前全景 (北東から)



(3) D区調査前全景 (南西から)



(4) E区調査前全景 (北西から)



(5) A1区全景 (南上空から)

図版 2



A1・A2区全景（南西上空から）



(1) A3区全景 (南西上空から)



(2) A4区全景 (南東上空から)

図版 4



(1) B1区全景 (北東上空から)



(2) B2区全景 (北東上空から)



(1) C区全景 (北上空から)



(2) D区全景 (南上空から)

図版 6



(1) E区全景 (西上空から)



(2) SD1・5・11全景 (北東から)



(3) SD1北西隅土層 (南東から)



(4) SD1東辺土層1 (北東から)



(5) SD1東辺土層2 (北東から)



(1) SD 2 全景 (南西上空から)



(2) SK 5 完掘状況 (北東から)



(3) SK 8 完掘状況 (北東から)



(4) SK 17 完掘状況 (南東から)



(5) SK 60 完掘状況 (北上空から)



(6) SK 65 土層 (南西から)



(7) SK 65 完掘状況 (北東から)



(8) SK 66 土層 (南から)

図版 8



(1) SK66完掘状況 (北から)



(2) SK67完掘状況 (北西から)



(3) SK70完掘状況 (西から)



(4) SK72完掘状況 (北上空から)



(5) SK73土層 (南から)



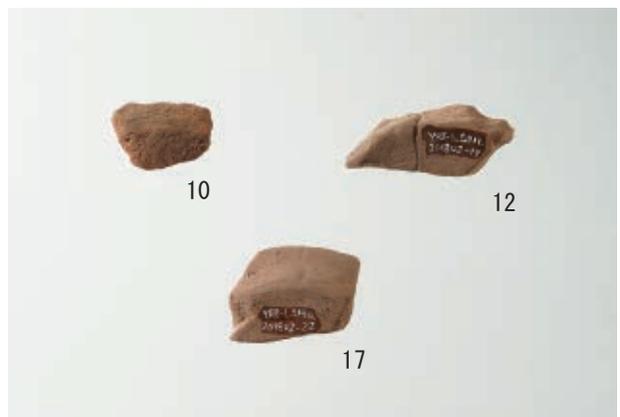
(6) SK73完掘状況 (北東上空から)



(7) SD75完掘状況 (北東から)

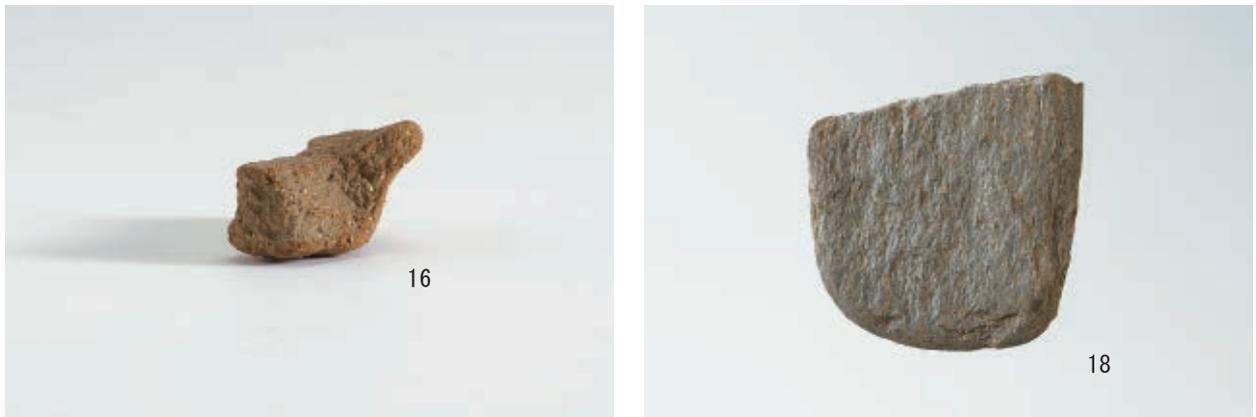
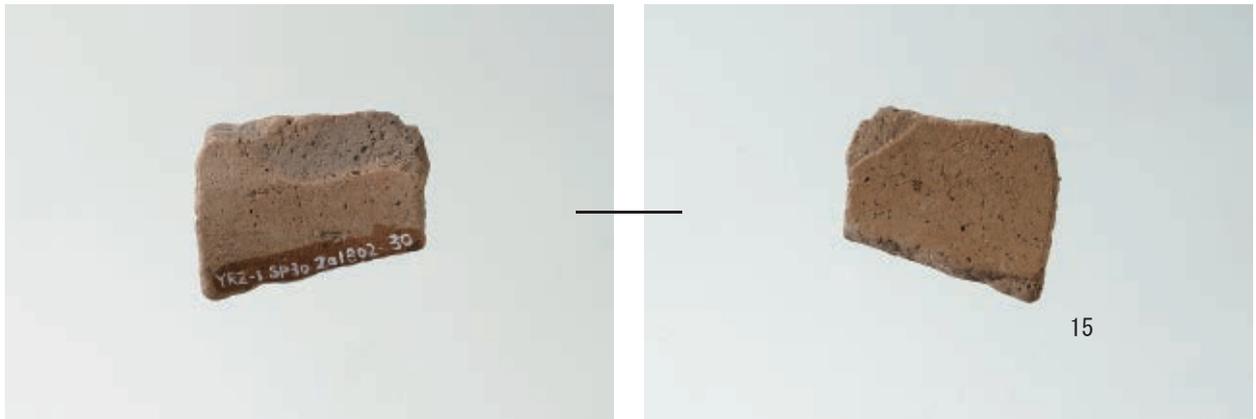
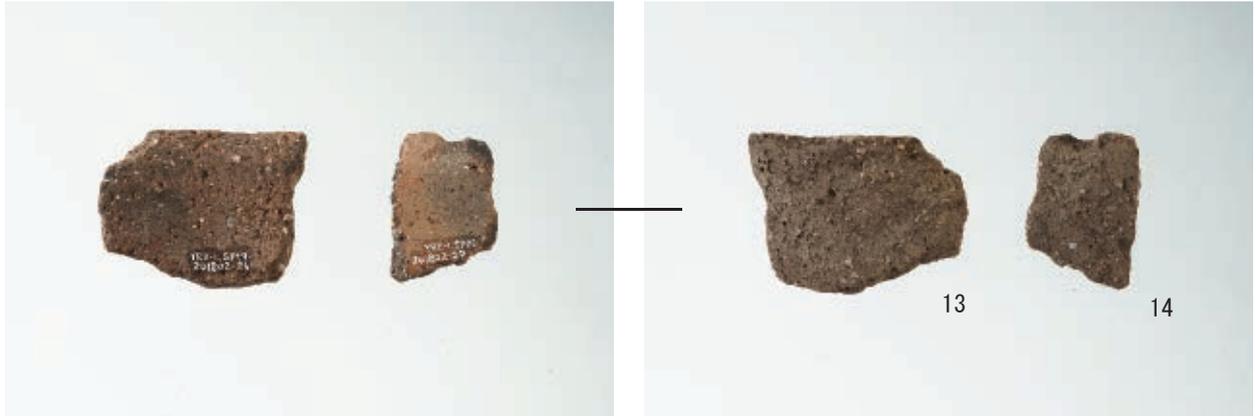


(8) SD78完掘状況 (北西から)

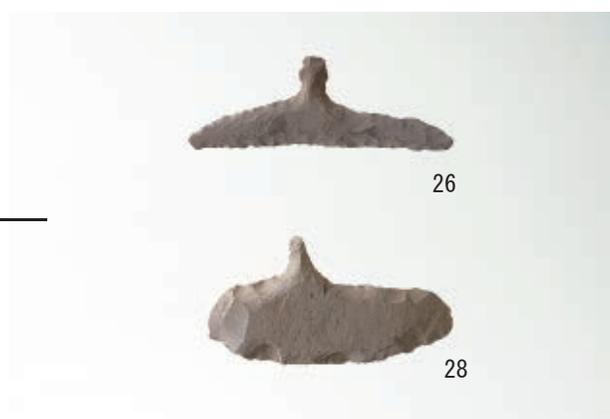


出土遺物 1

図版 10



出土遺物 2



图版 12



出土遺物 4

報 告 書 抄 録

ふりがな	やりみずいせき ーだい1じはつくつちょうさほうこくー							
書 名	鍮水遺跡 ー第1次発掘調査報告ー							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第413集							
編 著 者 名	西 拓巳 (編)							
編 集 機 関	久留米市 市民文化部 文化財保護課							
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9714 E-mail:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2020 (令和2)年2月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
やりみずいせき 鍮水遺跡 第1次調査	福岡県 久留米市 高良内町 ほか 4832外	40203	—	33° 17′ 14″	130° 32′ 50″	20180417 、 20181030	1,160 m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鍮水遺跡 第1次調査	集落	縄文 古代 中世	溝 5条 土坑 11基		縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、陶磁 器、石製品、金属製品		中世の屋敷の周 溝を発見した。	
要 約								
<p>調査地点は、耳納山地から派生する丘陵上に位置する。調査区は削平されているが、縄文時代の土坑やピットを検出し、後期後半から晩期にかけての土器や石製品が出土した。中世の溝は3条を検出した。いずれも並走する上にほぼ直角に屈曲しており、屋敷の周囲を二重に巡る周溝と考えられ、出土遺物から、14世紀前半の埋没が想定できる。これらの縄文時代や中世の遺構・遺物は、周辺の遺跡でも見つかっており、鍮水集落と高良内町の歴史的様相を復元するための、新たな資料を得ることができた。</p>								
土木工事の届出日	平成29年10月16日			遺物の発見通知日	平成30年11月7日 (30文財1037号)			

鑓水遺跡

—第1次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第413集

令和2年2月29日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

福岡県久留米市城南町15番3

印刷 服部印刷株式会社

久留米市梅満町410-1